

常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・

常盤仲之町遺跡

常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・

常盤仲之町遺跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成13年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、道路拡幅工事に伴う常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

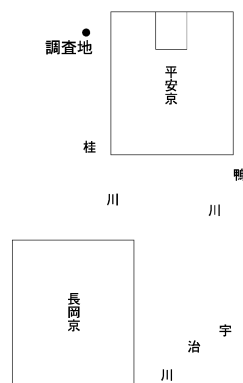
平成21年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦一ノ井町・常盤東ノ町他地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2008年11月10日～2009年3月17日
- 5 調査面積 985 m²
- 6 調査担当者 鈴木廣司・菅田 薫・小檜山一良・西大條 哲・山本雅和
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 遺構の種類毎に通し番号を付した。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 鈴木廣司・菅田 薫・山本雅和
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 1 区の遺構	7
(3) 2 区の遺構	16
(4) 3 区の遺構	22
(5) 4 区の遺構	22
(6) 5 区の遺構	29
(7) 6 区・7 区の遺構	29
4. 遺 物	30
(1) 弥生時代の遺物	30
(2) 古墳時代の遺物	31
(3) 飛鳥時代の遺物	33
(4) 平安時代以降の遺物	33
5. ま と め	38

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 区第 1 面全景（北から）
		2	1 区土坑 3（北西から）
図版 2	遺構	1	1 区第 2 面全景（北から）
		2	1 区竪穴住居 1・2（東から）
		3	1 区竪穴住居 3・4（北から）
図版 3	遺構	1	2 区全景（北から）
		2	2 区横穴式石室（北から）
図版 4	遺構	1	3 区土取土坑 9 上部石敷き検出状況（南から）
		2	1・3 区井戸 1（東から）
図版 5	遺構	1	4 区全景（北から）
		2	4 区竪穴住居 5～7（北から）

		3	4区土坑15（北から）
図版6	遺構	1	5区全景（北から）
		2	5区南半全景（北西から）
		3	5区柱穴3土器出土状況（東から）
図版7	遺構	1	6区全景
		2	7区全景
図版8	遺物		弥生土器・土師器
図版9	遺物		石製品・銅製品・ガラス製品・土製品・輸入陶磁器・須恵器

挿 図 目 次

図1	調査前全景（北から）	1
図2	作業風景（北東から）	1
図3	調査区配置図（1：1,000）	2
図4	周辺調査位置図（1：5,000）	4
図5	1～7区西壁断面模式図（1：40）	8
図6	1区西壁断面図（1：50）	9
図7	1区第2面竪穴住居配置図および竪穴住居1・2実測図（1：300、1：60、1：40）	10
図8	1区竪穴住居3・4実測図（1：60、1：40）	11
図9	1区第1面遺構平面図（1：100）	12
図10	1区溝1・2、掘立柱建物1断面図（1：40）	13
図11	1・3区井戸1実測図（1：40）	14
図12	1区土坑3実測図（1：40）	15
図13	2区遺構平面図（1：100）	17
図14	2区溝3・4、土坑7、掘立柱建物2断面図（1：50）	18
図15	2区横穴石室実測図（1：60）	19
図16	3区土取土坑9上部石敷き検出状況平面図（1：100）	20
図17	3区土取土坑9完掘状況実測図（1：150、1：100）	21
図18	4区遺構平面図（1：100）	23
図19	4・5区遺構平面図（1：100）	24
図20	4・5区溝5・6、土坑14～17断面図（1：40）	25
図21	4区竪穴住居5～7実測図（1：60）	26
図22	4・5区掘立柱建物3実測図（1：100）	27

図 23	6・7区遺構実測図（1：80）	28
図 24	弥生時代から飛鳥時代の出土土器実測図（1：4）	31
図 25	4区土坑15出土土器実測図（1：4）	32
図 26	1・3区井戸1出土土器実測図（1：4）	33
図 27	中世から近世の出土土器実測図（1：4）	34
図 28	5区柱穴3出土土器実測図（1：4）	34
図 29	出土軒瓦拓影・実測図（1：4）	35
図 30	出土石製品、金属製品、土製品拓影・実測図（1：2、58・59のみ1：1）	36
図 31	出土銭貨拓影（1：1）	37

表 目 次

表 1	周辺の主要な調査一覧表	5
表 2	遺構概要表	6
表 3	遺物概要表	30
表 4	出土土器観察表	39

常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡

1. 調査経過

太秦を縦断する府道宇多野・吉祥院線の慢性的な渋滞を緩和するため、その拡幅が計画された。新丸太町通から南へ約 500 m の区間を現状から幅 20 m 余りに広げようというものである。当該地は常盤東ノ町古墳群、村ノ内町遺跡、常盤仲之町遺跡にあたることや、太秦に位置すること、これまでに実施した周辺の発掘調査などの成果から、計画路線全域にわたって埋蔵文化財の稠密なことが予想される地域である。これらのことから京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導により発掘調査が実施されることとなった。今回の調査地は、府道宇多野・吉祥院線と新丸太町通の交差点南東部を起点として、同路線の東側を南へ約 120 m、幅約 12 m の区間である。発掘調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け実施した。

今回の発掘調査は、排土置き場・工事用ならびに生活用通路確保などの都合上、調査区を 7 区に分割して実施した。2008 年 11 月 10 日から準備工事を行い、12 日に新丸太町通寄りの一画を 1 区として重機掘削を開始した。立会調査の結果などから、遺構面に至るまでには盛土層などが 1 m 以上あると予想されたため、場内処理は不可能と判断した。そのため 1 区の排土の大部分は場外搬出とした。1 区に引き続き、18 日に 2 区の重機掘削にかかったが、当該調査区は銀行の跡地でほぼ全面に頑丈な基礎が残されていたため、その撤去・搬出を優先した。2009 年 1 月 6 日から新丸太町通沿いの 3 区、続いて今回の最南端に位置する 4 区の調査に取りかかった。いずれの調査区もその土量に応じて排土の搬出を適宜行っている。2 月下旬から 5 区の調査を開始した。また、5 区の調査期間中に小トレンチの 6・7 区を設定し補足調査を実施している。5 区の調査を終了し、埋め戻した後、調査対象地全面にわたって整地・転圧を行い、これをもって今回の調査をすべて終了した。調査区の番号は、上記のごとく調査を手掛けた順に名付けたものである。また、1・2・4・5 区の調査区は東西幅約 10 m を原則としたが、南北長に関しては旧宅地境に従ったため一定ではない。

なお、2 月 7 日には 3・4 区を対象として現地公開を実施し、多数の市民の参加を得た。



図1 調査前全景（北から）



図2 作業風景（北東から）

2. 位置と環境

当該地のある「常盤」周辺は、「山背国葛野郡」の一面に位置する。葛野郡は、古墳時代中頃から渡来系氏族「秦氏」が移り住み本拠地と成しており、数々の灌漑・土木・建築工事を興したとして知られている。蛇塚・仲野親王高島墓・天塚・清水山古墳など、数多の大型前方後円墳が点在することもその偉業の現れであろう。また、秦河勝が聖徳太子から拝領した仏像を祀ったと言われる広隆寺など古代寺院の建立もその勢力を示すものであろう。

大化の改新後、律令制に基づき京都盆地北西部には、北が大きく西に振る碁盤目状で縦長の「葛野郡条里」が、北は嵐山から南は桂まで南北長約 3.5 km、西が山々に規制されて東西幅は約 1.25 kmで施工された。常盤はこの条里のほぼ真ん中と言って良い位置にある。

調査地は『京都市遺跡地図』¹⁾では、村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群として周知されている。村ノ内町遺跡は弥生時代後期を中心とする集落跡で、立会調査で溝・土坑などが検出されている。常盤仲之町遺跡は古墳時代後期から江戸時代にわたる遺跡で、古墳時代から

飛鳥時代の遺構は竪穴住居・掘立柱建物、平安時代の遺構は掘立柱建物・溝、鎌倉時代から江戸時代の遺構は土壇墓が検出されている。また、常盤東ノ町古墳群は古墳時代後期の横穴式石室を備える円墳で構成される古墳群である。

調査地周辺では、これまでに多数の発掘調査・立会調査が行われている（図4、表1）。以下に主要な調査の概要を記す。

常盤東ノ町古墳群では、調査地に東隣する発掘調査（図4-2）で、古墳時代後期の墳丘の直径 14～18 m程度とみられる横穴式石室を備える円墳3基を検出した。横穴石室は1基が大半の石組を失っていたものの、2基に基底部石敷きと下段の石組1～3段が遺存している。そこから副葬品とみられる須恵器・土師器、鉄製品の鏃・刀子・皮吊り金具、銅製品の環・柄頭などが出土している。石室の傾きはほぼ北向き

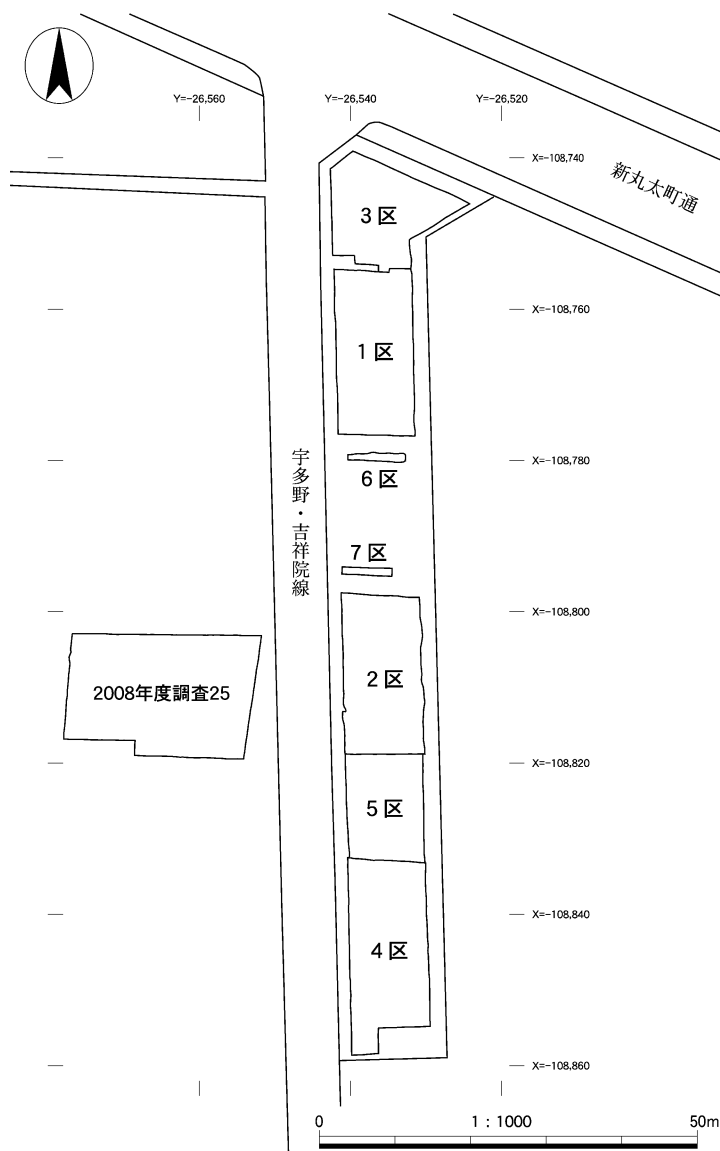


図3 調査区配置図 (1:1,000)

で、1基のみ約N 29° Wを測る。その他、鎌倉時代から江戸時代の多数の土坑墓・溝などを検出している。

2の調査東隣接地の発掘調査（図4-3）では、古墳時代後期の円墳などを検出した。出土遺物には古墳時代後期の土器などがある。

調査地東側の発掘調査（図4-4）では、平安時代中期の土坑などを検出した。出土遺物には弥生時代中期から古墳時代前期・平安時代中期の土器などがある。

調査地南西側の発掘調査（図4-10）では、古墳時代後期の円墳、平安時代後期の土坑などを検出した。出土遺物には古墳時代後期・平安時代後期の土器などがある。

調査地東側の試掘調査（図4-20）では、古墳の周溝と考えられる溝、平安時代から鎌倉時代の土坑などを検出した。

調査地西側の発掘調査（図4-25）では、飛鳥時代の竪穴住居・堀状遺構、平安時代の池状遺構・土坑・柱穴、江戸時代の土坑・柱穴などを検出した。出土遺物には弥生時代・古墳時代・飛鳥時代の土器、平安時代の土器・瓦、江戸時代の土器などがある。

常盤仲之町遺跡では、調査地南西の発掘調査（図4-5）で、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居24棟・掘立柱建物4棟を検出した。その他、平安時代の掘立柱建物・溝・土坑、鎌倉時代から室町時代の溝・土坑、江戸時代の土坑墓などを検出している。

調査地南西側の発掘調査（図4-8）では、鎌倉時代から室町時代の柱穴、江戸時代の溝などを検出した。出土遺物には鎌倉時代から江戸時代の土器などがある。

調査地南側のJR嵯峨野線軌道敷き内南側の発掘調査（図4-23）では、弥生時代中期・古墳時代後期・飛鳥時代の竪穴住居、平安時代の溝などを検出した。出土遺物には弥生時代中期の土器、古墳時代後期の土器類・石製品、飛鳥時代の土器・土製品・石製品などがある。

調査地南側のJR嵯峨野線軌道敷き内北側の発掘調査（図4-24）では、弥生時代中期・古墳時代後期の竪穴住居、飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物、奈良時代から平安時代の掘立柱建物・溝、鎌倉時代の池・土坑などを検出した。出土遺物には縄文時代の石器、弥生時代中期・古墳時代後期の土器、飛鳥時代の土器・ガラス製品、奈良時代から平安時代の土器、鎌倉時代の土器・石製品などがある。

このほか、双ヶ岡西麓では鳥羽離宮跡調査研究所が1976年に実施した発掘調査（図4-1）で、室町時代頃と考えられる土師器皿の出土する窯を検出している。

註

1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年

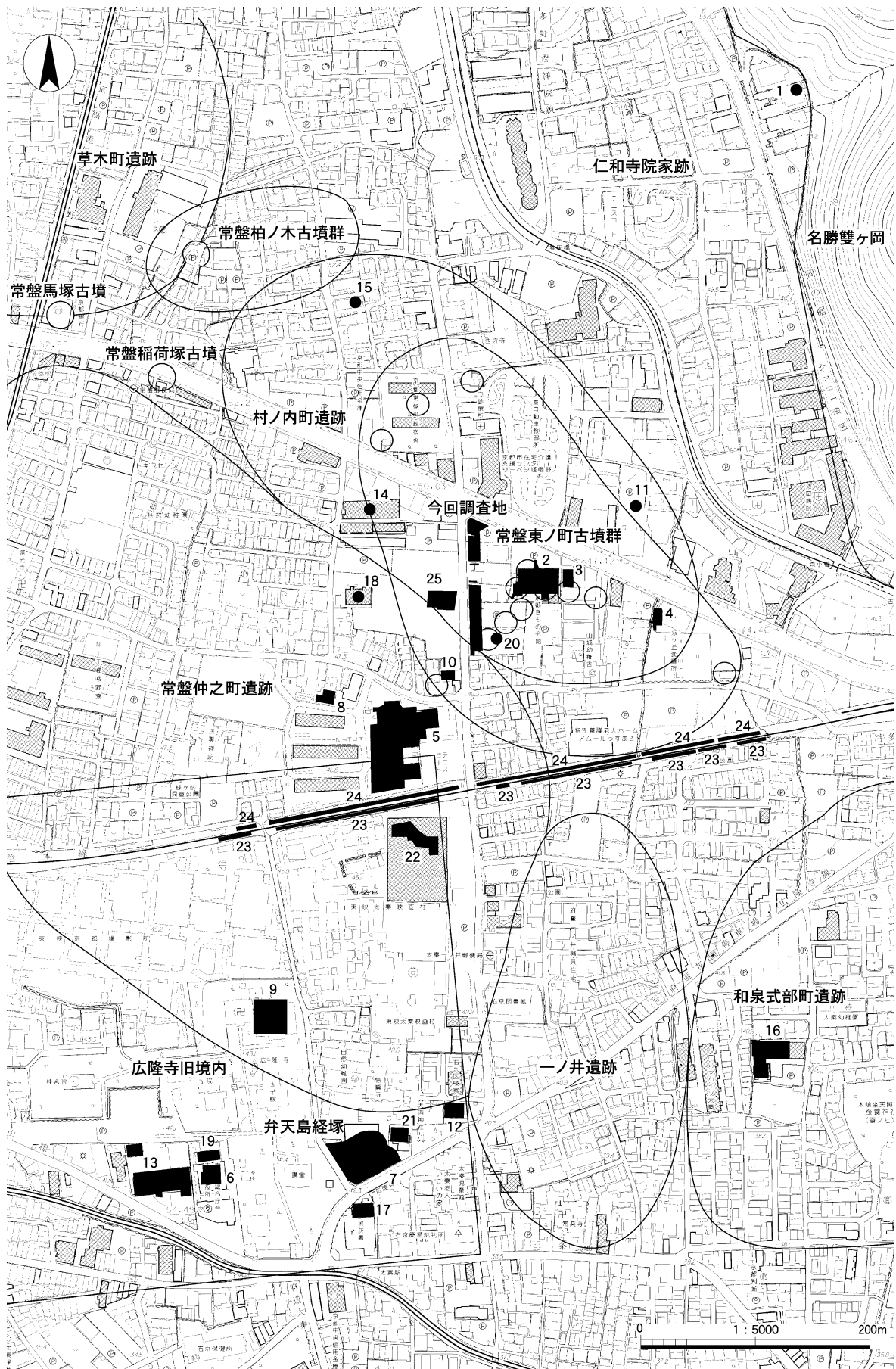


図4 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

表1 周辺の主要な調査一覧表

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文献
1	1974	発掘	1974.11.01～ 1975.01.15	室町頃の土師器皿の出土する窯	『平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要』『埋蔵文化財発掘調査概報集』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
2	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
3	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
4	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	平安の柱穴群・土坑2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	『仁和寺寺院跡』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
5	1976	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	古墳後期の竪穴住居24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
6	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の基壇、奈良～平安の建物、瓦・須恵器・土師器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
7	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品他	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
8	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18	室町の柱穴・土坑	『日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査』『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
9	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	古墳後期の竪穴住居、平安・鎌倉・室町の土坑、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
10	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
11	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	『調査概要一覧表』『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
12	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	古墳後期の竪穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡-右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要-I』昭和55年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
13	1981	発掘	1981.07.13～ 1982.03.12	飛鳥の土坑、平安時代の梵鐘製造遺構	『広隆寺跡』『京都府遺跡調査概報』第5冊-2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
14	1982	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期～室町の土坑・包含層、土師器・白磁	『調査概要一覧表』『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
15	1986	試掘立会	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土坑・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	『調査一覧表 太秦地区』『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
16	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の竪穴住居、古墳前期の竪穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	『和泉式部町遺跡』『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
17	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土坑、平安～室町の包含層	『広隆寺旧境内1』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
18	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05	平安前期の長方形土坑、須恵器	『調査一覧表 太秦地区』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
19	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土坑・柱穴、江戸の溝	『広隆寺旧境内2』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
20	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・銭	『常盤東ノ町古墳群』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
21	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の竪穴住居・土坑、平安中期の溝・柱穴	『広隆寺旧境内』『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
22	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の竪穴住居4、平安～江戸の遺構	関西文化財調査会による発掘調査実績報告
23	2006	発掘	2006.01.20～ 2006.07.20	弥生の竪穴住居、古墳～飛鳥の竪穴住居、鎌倉の土壇墓・溝・柱列	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
24	2008	発掘	2008.04.11～ 2008.06.27	弥生の竪穴住居、古墳後期～飛鳥の竪穴住居・溝ほか	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
25	2008	発掘	2008.11.25～ 2009.01.14	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年

※ Noは図4の調査地点の数字と対応

3. 遺 構

(1) 基本層序

府道宇多野・吉祥院線は、新丸太町通から南へ向かい緩傾斜をもって下がっている。調査に掛かる前の今回の調査対象地は、道路に準じ同様の緩傾斜を有するが、宅地あるいは駐車場として使用されていたため旧地境ごとに盛土・削平による水平面が形成されている状況であった。

調査対象地が長さ 100 m 以上あるため、理解の補助として各調査区の西壁断面実測図から柱状図（図 5）を作成した。これを基にして発掘調査で確認した堆積状況の概略を述べる。

北半部に相当する新丸太町通寄りの 1・3 区では、盛土層が 0.5 ～ 0.8 m の厚さで、ついで耕作土層の新旧 2 層が 0.2 ～ 0.3 m の厚さで観察できる。耕作土層の直下が遺構面となり、その基盤は厚さ約 1.5 m を測る無遺物層の黄褐色を呈する粘土～砂泥層である。この上面で平安時代後期の溝や古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居などを認めている。一方、南半部では 4 区の最南端部が盛土層 0.15 m、耕作土層は 0.1 m 程の厚さを測り、直下が褐色を呈する砂礫混じりの砂泥層の遺構面となっている。中間部に当たる 2 区は、コンクリート基礎による攪乱の影響が大きい。堆積状況は盛土層が 0.3 ～ 0.4 m、耕作土層は 0.2 ～ 0.3 m の厚さである。直下が遺構面で南半部同様の褐色を呈する砂礫混じりの砂泥層である。ここでは掘立柱建物などや飛鳥時代の土坑・溝および古墳の横穴石室の基底部などを認めている。遺構面は地形に準じた南下がりの緩傾斜を伴っていたもので、その比高から耕作地転用の際、ひな壇状に削平されたものと考えられる。現地表面の標高は 3 区で約 49 m、4 区南端が約 47.5 m で約 1.5 m の比高差を測る。

各調査区の基本層序は、図 5 に示した様に単純である。ここでは各調査区の断面図を掲げるといふ煩雑さを避け、図 6 に 1 区の西壁断面図を例示するに止める。

表 2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	横穴式石室 1 基、土坑	
飛鳥時代	竪穴住居 7 棟、溝、土坑	
平安時代	溝、土坑、柱穴	
鎌倉時代	井戸、土坑、柱穴	
室町時代	掘立柱建物、土取土坑、土坑、	
安土桃山時代	掘立柱建物、土坑	
江戸時代	土坑、柱穴	

(2) 1区の遺構(図9、図版1・2)

1区は、北西隅から重機掘削を開始した。当地点では、地表下約0.8mで遺構面とみられる黄褐色砂泥層と暗褐色泥砂層の境目を検出している。同ラインは南へ直線的に連続し、やがて東へ折れ曲がることから竪穴住居の検出が予想できた。そのため東方向および南方向へは同一レベルで掘削することとした。結果として、暗褐色～黒褐色泥砂層の拡がりに所々黄褐色砂泥層が露呈する状況で重機掘削を終えた。以降、暗褐色～黒褐色泥砂層を第1層(遺物包含層)として人力で掘り下げた。第1層は旧耕作土層と考えている。中世から近世の遺物が多量に出土した。

同一遺構面上で検出した遺構群は、それぞれの堆積土の状況や切り合い関係などから、大きく2時期に分かれると考えられる。そのため、第1面は平安時代後期から鎌倉時代頃と江戸時代の遺構群、第2面は古墳時代後期から飛鳥時代頃の遺構群とに大別し調査を進めた。

第2面の遺構には、竪穴住居がある(図7・8)。竪穴住居は、一辺4～5m程の平面形が方形を呈するもので4棟検出した。削平を受け、また溝などに切られていることもあって遺存状況はあまり良くない。南側の一群は2棟が平行するように並び、北側の一群は2棟が重なり合う。これら4棟の竪穴住居は、北が大きく西に振る類似した傾きを有している。

竪穴住居1(図7、図版2) 竪穴住居2の床面精査中に検出した。方形を呈するものと考えられるが、東半は溝2に切られ南西部のみ遺存する。検出規模は東西約3.0m、南北約3.6mである。図7断面図2層が貼り床と考えられる。南辺の壁溝を確認した。支柱穴は確認できなかった。N27°W前後の傾きを持つものと考えられる。土師器小片と須恵器杯蓋6が出土した。

竪穴住居2(図7、図版2) ほぼ方形と考えられる。北東角を下水道管に、南東辺の一部を溝2に切られる。規模は東西約4.2m、南北約4.8mを測る。図7断面図10層が貼り床と考えられる。壁溝は4辺で確認した、西辺で一部途切れる箇所があり、柱穴と合わせて出入り口の可能性も考えられる。下水道管で大部分を失っているが、竈の痕跡とみられる焼土の分布を北辺中央部付近で検出した。北辺より外方に張り出した竈・煙道を持つものと推定できる。支柱穴は確認できなかった。N25.5°Wの傾きを持つものと考えられる。土師器細片が少量出土したのみである。

竪穴住居3(図8、図版2) 方形を呈する。中央部と北東角を溝2で、北西角を土坑3で失う。規模は東西約5.0m、南北約4.8mを測る。図8断面図2層が貼り床と考えられる。壁溝は4辺で確認した。竈および支柱穴は確認できなかった。N28°Wの傾きを持つものと考えられる。土師器甕5が北辺の壁溝から、須恵器細片が床面から出土した。

竪穴住居4(図8、図版2) 長方形を呈する。中央部を溝2で失い、南東角は調査区外となる。規模は東西約4.7m、南北約3.8mを測る。図8断面図2層が貼り床と考えられる。壁溝は4辺で確認した。竈および支柱穴は確認できなかった。N25°Wの傾きを持つものと考えられる。土師器杯2と須恵器細片が覆土から出土した。

壁溝はそれぞれの住居で確認できたが、支柱穴はすべての住居に確認のための断割りを施しても検出できなかった。支柱がすべて掘立柱であるという認識を改める必要があるのかもしれない。

第1面の遺構には、掘立柱建物、井戸、調査区中央部を南北に走る溝2条と土坑などがある。

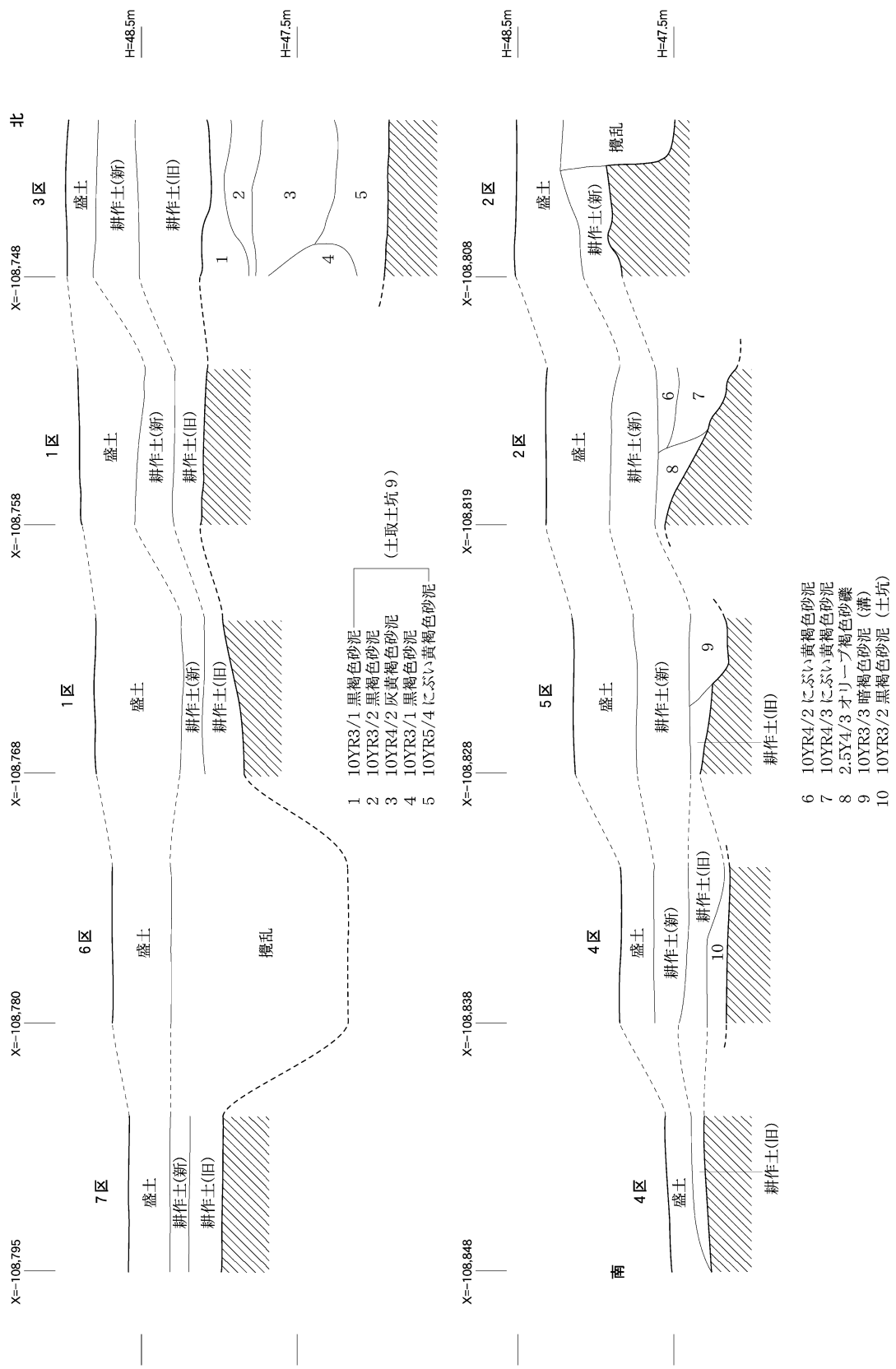


図5 1～7区西壁断面模式図 (1:40)

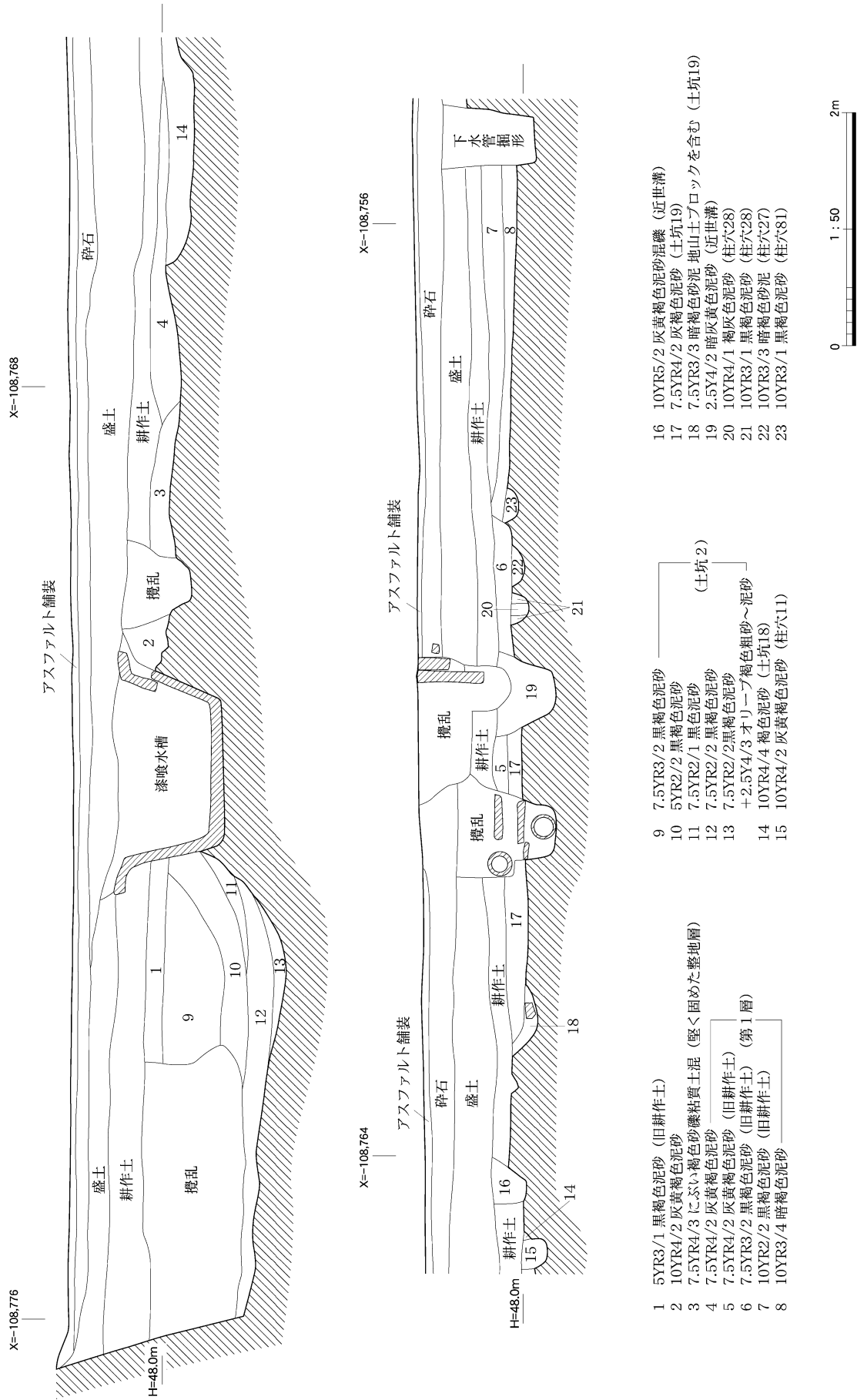


図6 1区西壁断面図 (1:50)

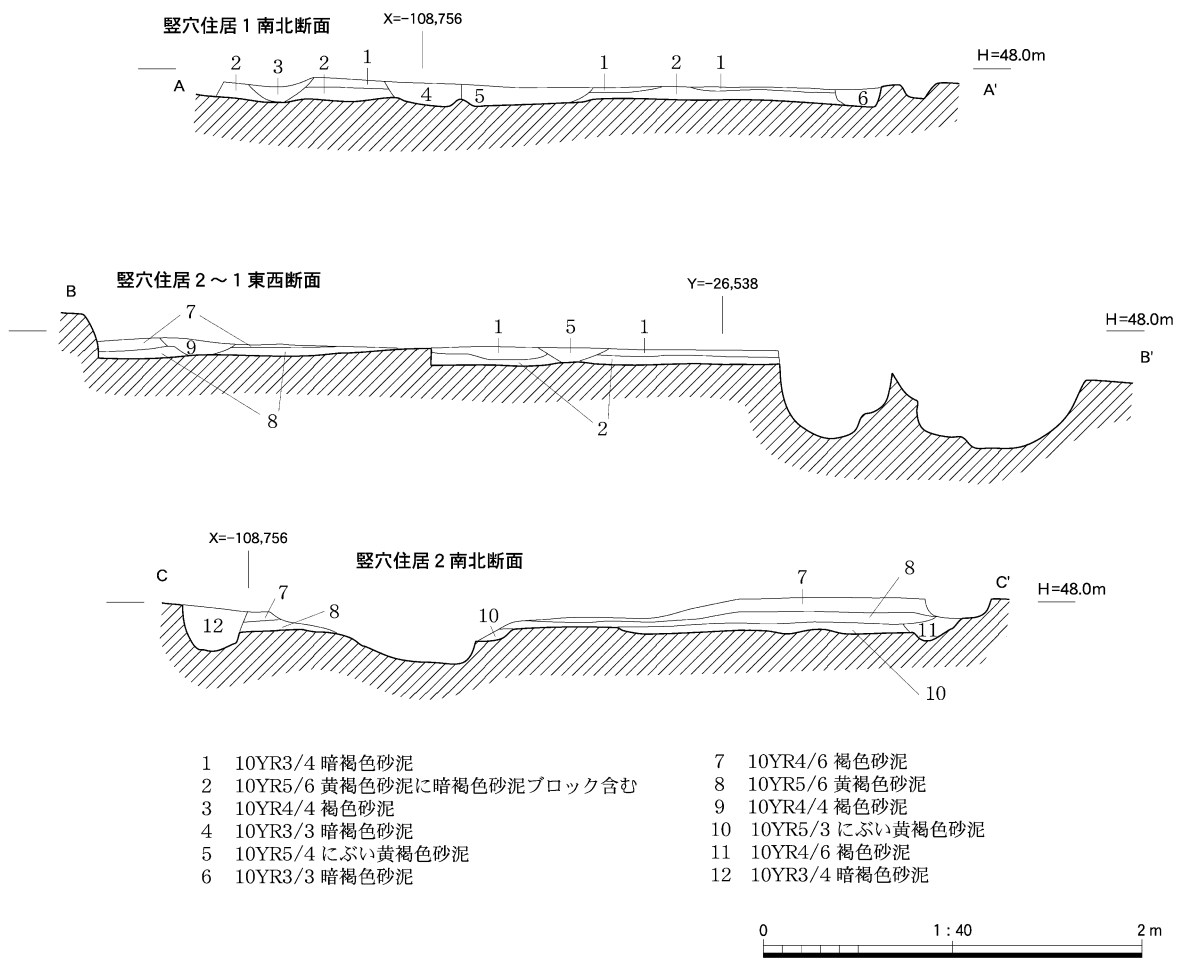
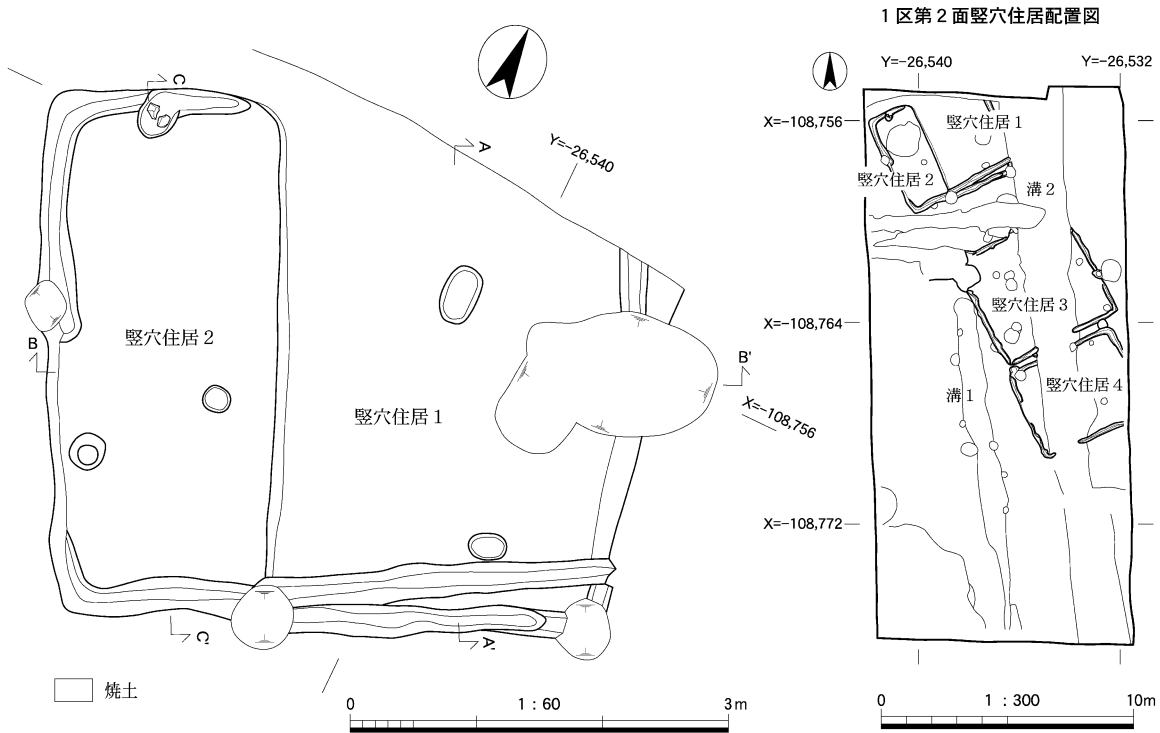


図7 1区第2面竪穴住居配置図および竪穴住居1・2実測図 (1:300、1:60、1:40)

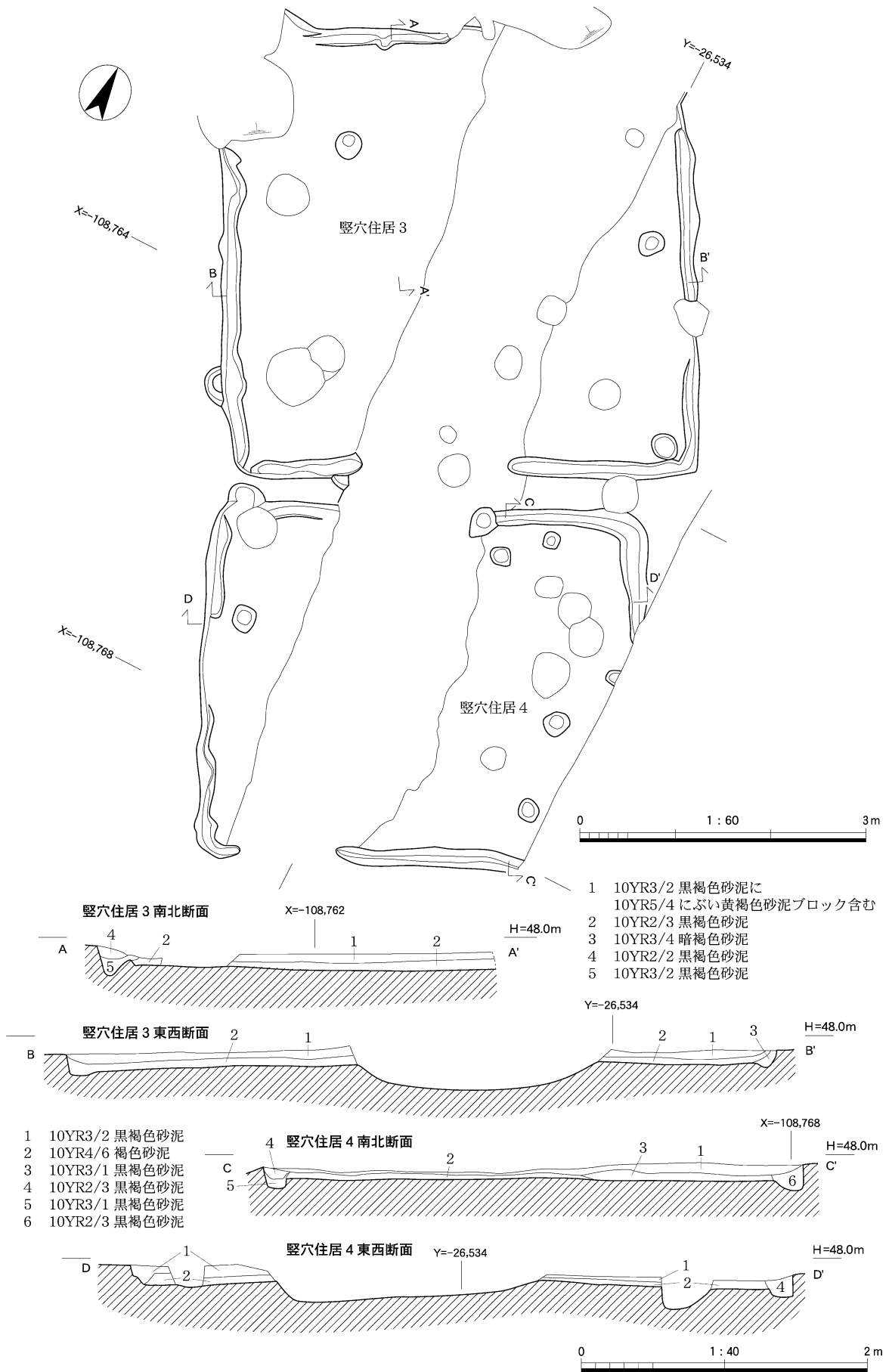
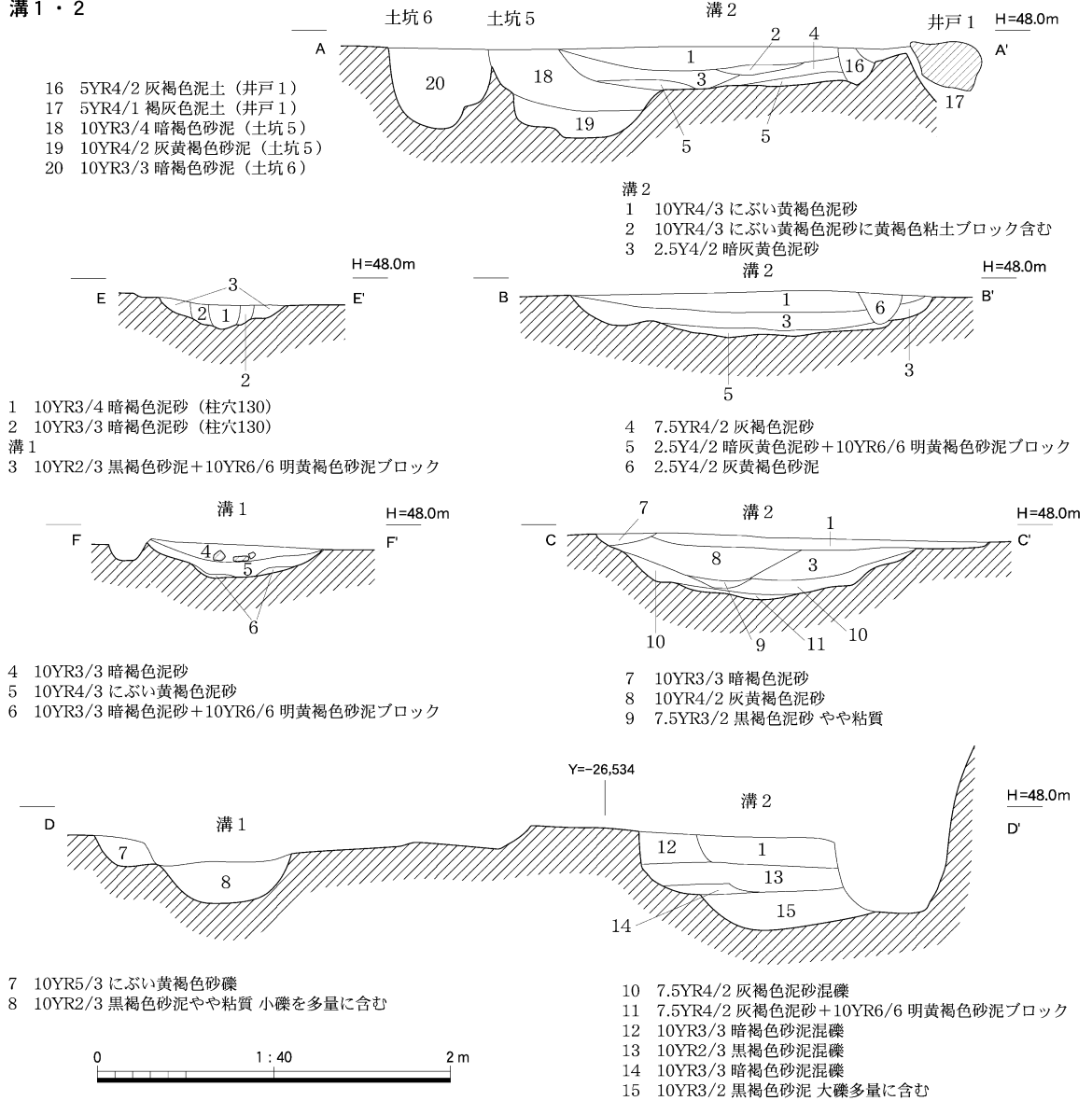


図8 1区竪穴住居3・4実測図 (1:60, 1:40)



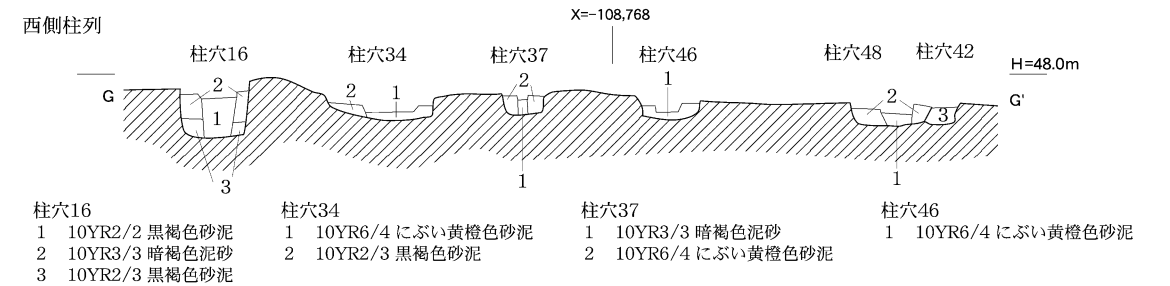
图9 1区第1面遺構平面図 (1:100)

溝1・2



掘立柱建物1

西側柱列



南側柱列

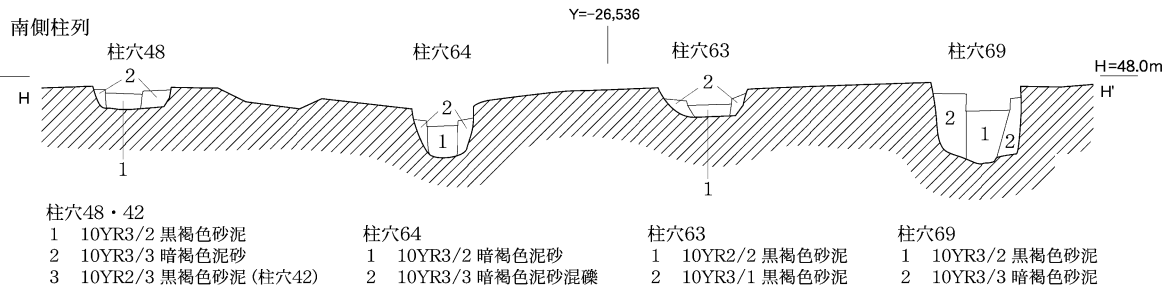


図10 1区溝1・2、掘立柱建物1断面図 (1:40)

掘立柱建物 1 (図 9・10) 南北 3 間 (約 3.6 m)、東西 3 間 (約 4.5 m) の東西棟とみられる。直径 0.5 m 前後の円形の柱穴で構成される。溝 1・2 を切る。N 22° W の傾きを持つ。土師器・瓦器・焼締陶器・瓦の細片が出土していることから中世のものと考えられる。

井戸 1 (図 11、図版 4) 石組みの井戸である。1 区と 3 区にまたがり検出した。溝 2 を切る。掘形はやや歪な円形を呈し、直径およそ 2.5 m を測る。井戸枠もやや歪な円形で、直径は約 2 m を測る。深さは不明である。枠組みから落下した巨石のため、約 1.5 m 掘り下げた時点で中断した。枠組みの石材は大きなもので一辺 0.7 m を超える一抱えもあるようなものから、人頭大の大きさの角張った石まであり、この人頭大の石を多数使用している。構築方法はやや乱雑で、枠組みに捻れが生じている。堆積土層は落下した巨石の上端を境に大きく 2 層に分かれる。上層が 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥に 10YR5/6 黄褐色粘土ブロックが混入する締まりの悪い土である。下層は 10YR4/4 褐色砂泥混礫に 10YR5/6 黄褐色粘土ブロックが混入するやや粘質を持った土

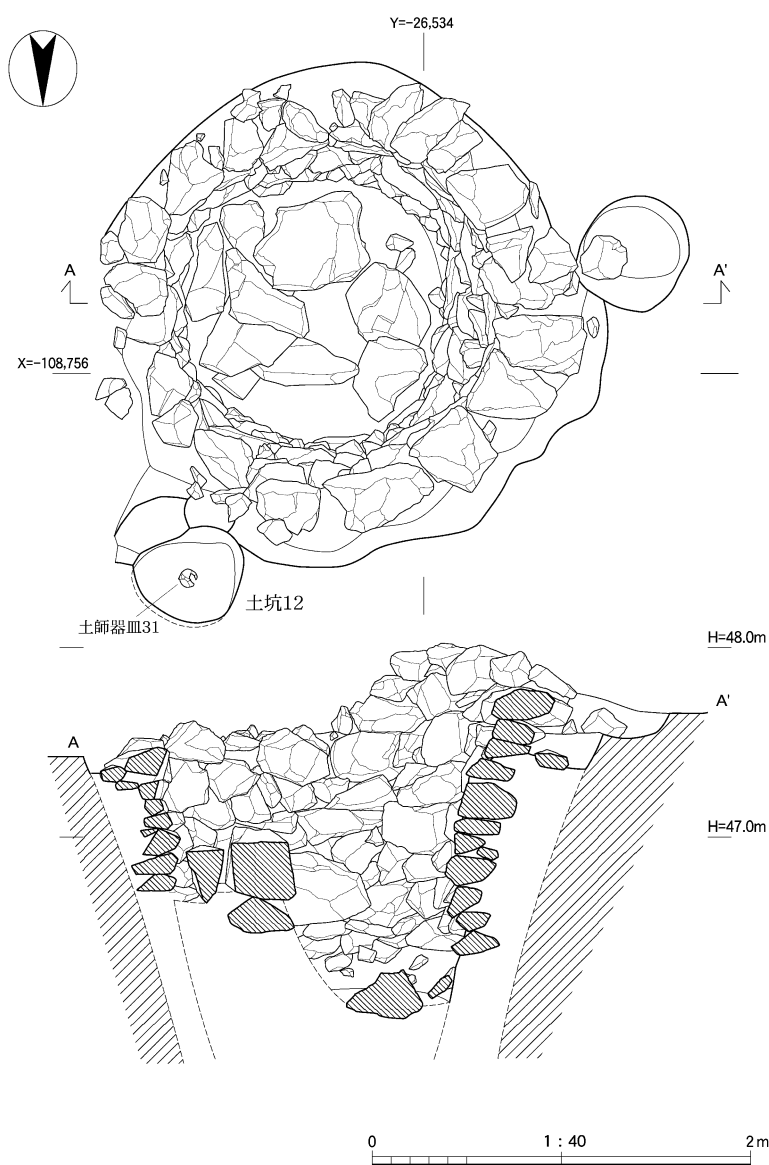


図 11 1・3区井戸 1 実測図 (1:40)

となっている。石材の大部分は、近辺の御室川や天神川で採取できる珪岩を使用している。土師器・瓦器・須恵器系陶器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦・石製品などが出土した（図 26・30）。鎌倉時代頃と考えられる。

井戸 1 掘形の北東部に接して穿たれた円形の土坑 12 の底部中央から土師器小皿を伏せた状態で検出した。井戸 1 の地鎮の可能性も考えられる。

溝 1（図 9・10） 検出長約 13.5 m、幅約 1 m、深さ 0.1～0.15 mを測る。北端は調査区の中程を過ぎた所で途切れる。南下がりの緩傾斜を持つ。南端は調査区外へ延びる。平安時代後期と考えられる土師器・須恵器・瓦片が出土している。

溝 2（図 9・10） 溝 1 の東側に併走する。検出長約 26 m、幅約 1.5 m、深さ 0.3～0.8 mで南に向かって深くなる。北端は 3 区の土取土坑 9 に切られる。南端は調査区外へ延びる。平安時代後期と考えられる土師器・須恵器片が出土している。

両溝は、北がやや西に振る傾き（8°前後）を有し、溝の心々間は約 3.5 mで平行に走る状況を呈している。平安時代後期の道路遺構を検出した可能性がある。

土坑 1 調査区北西部で検出した。東西約 1.6 m、南北約 1.3 m、深さ約 0.4 mを測る楕円形の土坑である。壁面に廻らした白色粘土の表面が赤く焼け締まっていることから、何らかの焼成土

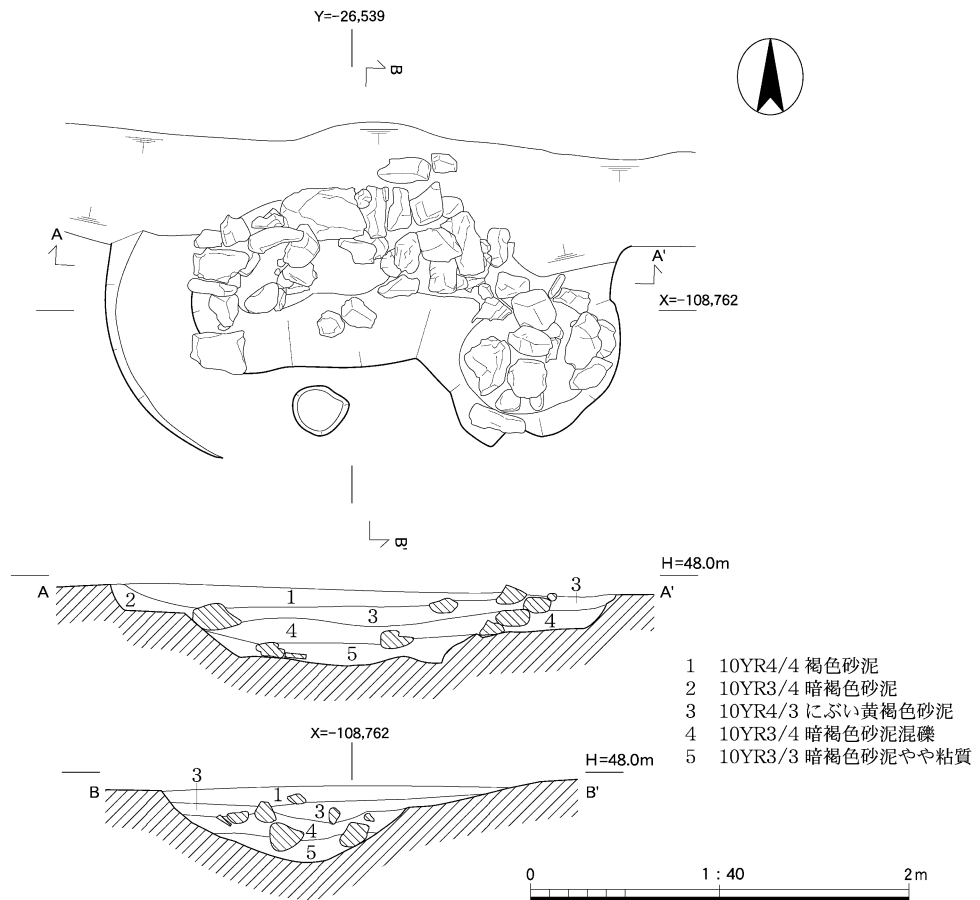


図 12 1 区土坑 3 実測図（1：40）

坑と考えられる。江戸時代のものである。

土坑2 調査区南西部で検出した調査区外に広がる遺構である。検出長は東西約4 m、南北約4 m、深さ約1.2 mを測る。大型の土坑あるいは溝の一部と考えられる。平安時代前期の土師器・須恵器などが出土した。

土坑3 (図12、図版1) 調査区北西部で検出した。検出長は東西約2.5 m、南北約1.2 m、深さ約0.3 mを測る。長円形の土坑に、人頭大から拳大の石を多量に投げ込んだ状況を呈する遺構である。銭貨63が出土した。江戸時代のものである。

土坑4 調査区北部と3区で検出した。溝2を切る。東西約1.2 m、南北約1.0 m、深さ約0.6 mを測る円形の土坑である。埋土は10YR3/3暗褐色砂泥である。土師器皿片と瓦器羽釜36が出土した。鎌倉時代のものと考えられる。

土坑5 調査区北部で検出した。溝2に切られる。東西約1.5 m、南北約1.0 m、深さ約0.5 mを測る楕円形の土坑である。土師器・瓦器片が出土した。

土坑6 調査区北部で検出した。土坑5に切られる。東西約0.6 m、南北約0.9 m、深さ約0.5 mを測る楕円形の土坑である。土師器・瓦器・須恵器片が出土した。

(3) 2区の遺構 (図13、図版3)

2区は銀行があったときの頑丈な基礎がそのまま残っており、基礎の底場が即、遺構面であった。古墳の石室、掘立柱建物、溝、土坑などを検出した。

横穴式石室 (図15、図版3) 古墳時代後期とみられる石敷き遺構を検出した。石敷きは南北5.6 m、東西は北側で1.8 m、南側で0.8 mを測る範囲に、拳大から0.2 m程の扁平な川原石を敷き詰めている。また、この石敷部分を中心に南北約8.5 m、東西約4 mの範囲に破碎されたとみられる0.2～0.5 m程の角張ったチャート片が散在していた。この調査区は旧建物のコンクリート基礎が遺構面の大半を削平しており、その基礎のグリ石がほぼ全面にわたってあったため当初は攪乱とみていたが、南北8.5 m、東西4 mの範囲だけが、グリ石とは石材が異なっていたことから遺構として調査を進めた。角張ったチャート片を除去すると石敷きの巡りに土坑群を検出し、全体の形状から上部の石材がすべて失われた横穴式石室の基底部と判断した。石敷きの方位はN 16.5° Eの傾きを持つ。推定玄室部は長軸2.6 m、短軸1.8 m、羨道部は長さ約3.0 m、幅1.2 mある。石室の掘形は、側壁の石材の抜き取りとみられる土坑の範囲から南北8.5 m、東西3.0～4.6 mの規模を持つとみられる。石室基底部の石敷きおよび側壁抜き取り痕から南に開口する片袖式の横穴式石室とみられる。また、石室の南東側で検出した溝3は、羨道の延長線上でとぎれることから、この石室に伴う古墳の周溝とみることもできる。

出土遺物は羨道部南端の石敷きから土師器甕の小破片が出土したが、時期を判断できるものはない。また、石敷きの中から土製丸玉59、ガラス小玉60が各1点出土した。

掘立柱建物2 (図14) 2区南半で検出した。石室・溝3を切る。南北3間(約4.9 m)、東西3間以上(約5 m以上)の建物とみられる。柱間は1.6 m等間で狭い。N 11.5° Wの傾きを持つ。

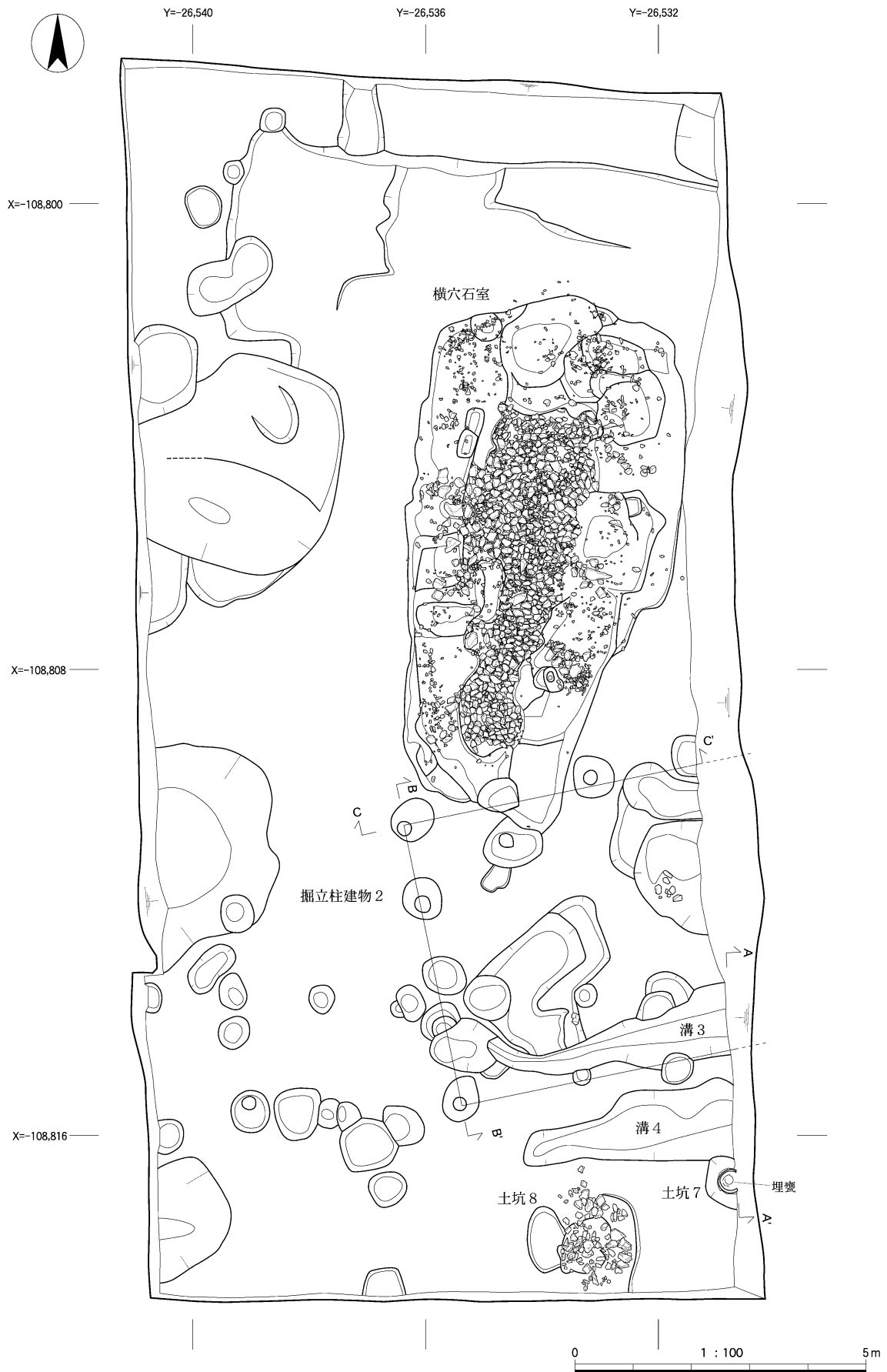
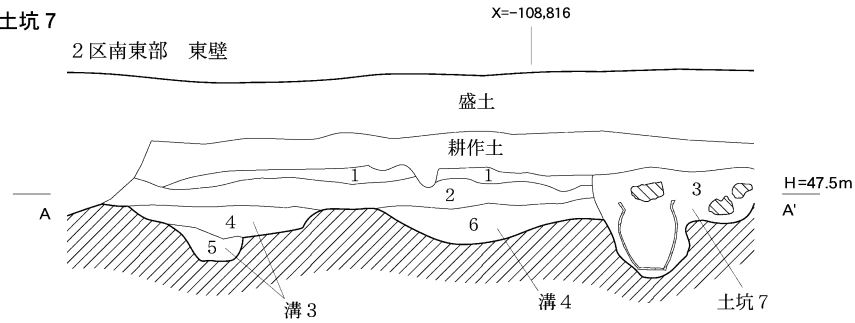


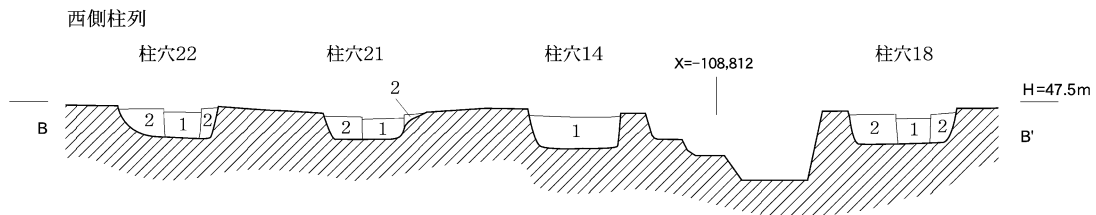
图 13 2区遗构平面图 (1:100)

溝3・4、土坑7

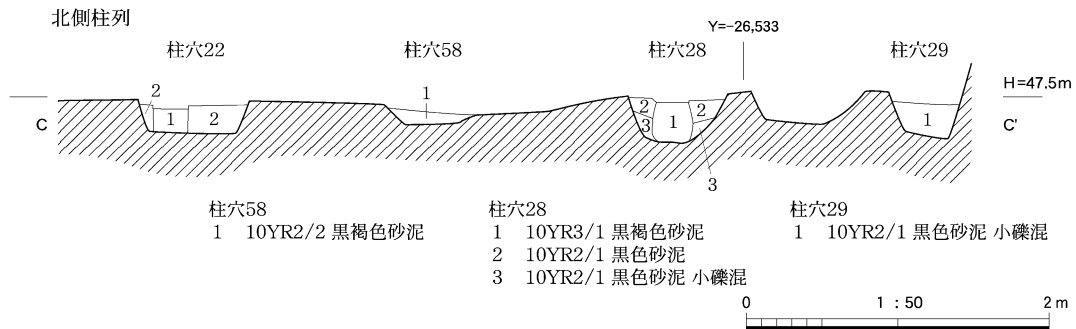


- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| 1 10YR2/1 黒褐色砂泥 小～大礫を少量含む (近世整地層) | 4 10YR3/2～2/2 黒褐色砂泥 小～大礫をかなり含む |
| 2 10YR3/1 黒褐色砂泥 小～中礫を少量含む (近世整地層) | 5 10YR3/2 黒褐色砂泥 小～大礫を少量含む |
| 3 10YR3/2 黒褐色砂泥 小～大礫をかなり含む | 6 10YR3/2～2/2 黒褐色砂泥 小～大礫をかなり含む |

掘立柱建物2



- | | | | |
|---------------------|---------------------|-----------------|---------------------|
| 柱穴22 | 柱穴21 | 柱穴14 | 柱穴18 |
| 1 7.5YR2/1 黒色砂泥 小礫混 | 1 7.5YR2/1 黒色砂泥 小礫混 | 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 1 10YR2/2 黒褐色砂泥 |
| 2 10YR2/1 黒色砂泥 | 2 10YR2/1 黒色砂泥 | | 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 小礫混 |



- | | | |
|-----------------|--------------------|--------------------|
| 柱穴58 | 柱穴28 | 柱穴29 |
| 1 10YR2/2 黒褐色砂泥 | 1 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 1 10YR2/1 黒色砂泥 小礫混 |
| | 2 10YR2/1 黒色砂泥 | |
| | 3 10YR2/1 黒色砂泥 小礫混 | |

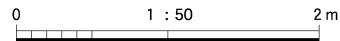


図14 2区溝3・4、土坑7、掘立柱建物2断面図 (1:50)

柱穴掘形からの出土遺物はなく、時期は不明である。

溝3 (図14) 2区南東部で検出した。溝3は最大幅1.2m検出面からの深さ0.35mある。東西に約4m確認したが、西側で先細りして終わる。当初、古墳に伴う周溝と考え、先細りして終わる付近を石室の開開口部と考えたが、出土遺物もなく性格は不明である。

溝4 (図14) 2区南東部で検出した。溝4は最大幅1.3m、深さ0.25mある。溝3に並行し、溝の心々で約1.8mある。溝3同様に西側で先細りして立ち上がる。出土遺物はなく性格は不明である。

土坑7 (図14) 2区南東部で検出した。一辺約0.8mの隅丸方形の掘形を持ち、口縁部を上垂直に甕を据える。甕は信楽産で近代である。基部は黄褐色の粘土層を甕の周囲に巻き固定している。

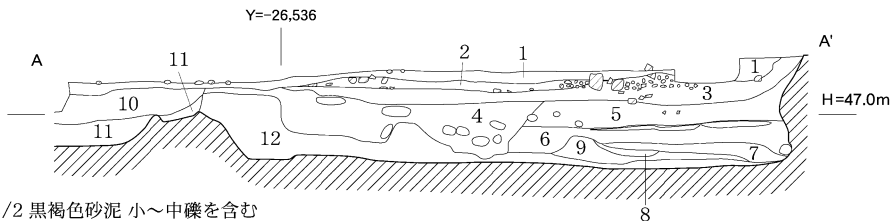
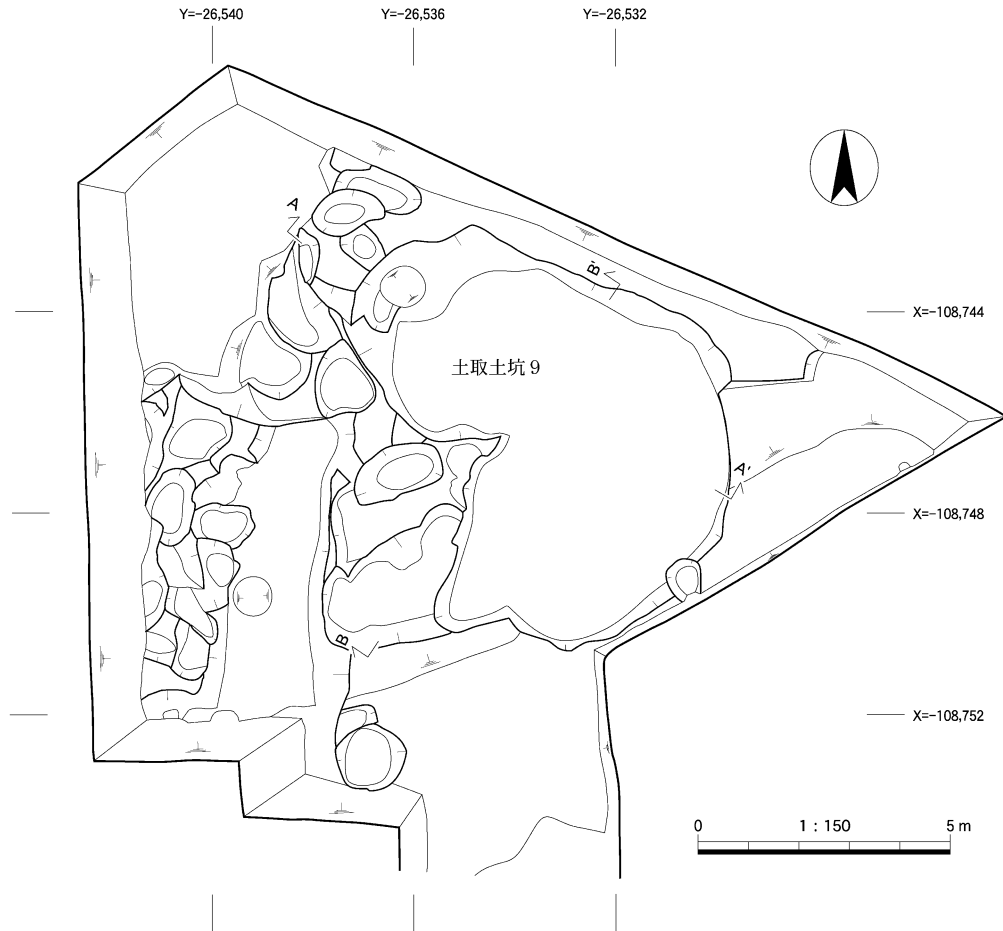
土坑8 土坑7の西約2.5mの位置で検出した。拳から小児の頭程の円礫を敷く。上面は堅く



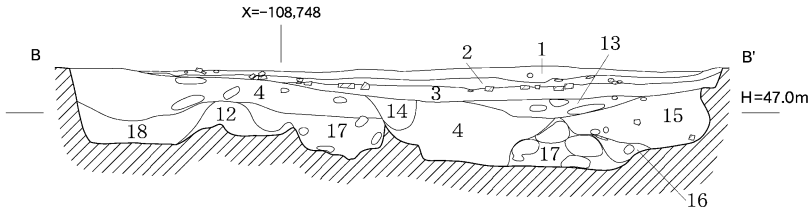
图 15 2区横穴石室实测图 (1 : 60)



図 16 3区土取土坑9上部石敷き検出状況平面図 (1:100)



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 小～中礫を含む
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 小～大礫を多量に含む
- 3 10YR3/2 黒褐色砂泥 小～大礫を多量に含む
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥に10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロックを含む
- 5 10YR3/3 暗褐色砂泥に10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロック・小礫を若干含む
- 6 10YR3/4 暗褐色泥砂に10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロック・10YR5/6 黄褐色粘土ブロックが混じる
- 7 10YR3/3 暗褐色砂泥 小礫を含む
- 8 10YR5/6 黄褐色砂泥



- 9 10YR3/4 暗褐色砂泥に10YR5/6 黄褐色砂泥ブロックを含む
- 10 10YR3/3 暗褐色泥砂混礫
- 11 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭・小礫混
- 12 10YR5/6 黄褐色砂泥
- 13 10YR3/4 暗褐色砂泥に10YR5/6 黄褐色砂泥ブロックを含む
- 14 10YR3/4 暗褐色砂泥に10YR5/6 黄褐色砂泥ブロックを含む
- 15 10YR3/3 暗褐色砂泥混礫に10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロックが混じる
- 16 10YR3/2 黒褐色砂泥+10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥ブロック
- 17 10YR3/3 暗褐色砂泥に10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロックが多量に混じる
- 18 10YR3/3 暗褐色砂泥に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロックを含む

□ 粘土ブロック

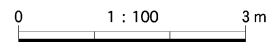


図17 3区土取土坑9完掘状況実測図 (1:150、1:100)

焼け締まっており、竈の基底部とみられる。土坑7の埋甕とセットをなすとみられる。

(4) 3区の遺構

3区では、南東部でいくつかの柱穴・土坑を検出したが、調査区の大部分は土取土坑である。

土取土坑9(図16・17、図版4) 調査区北部全域に広がる、土取土坑を検出した。検出規模は東西12m、南北11mを測る。土取土坑はさらに調査区の北側および西側に展開するものと考えられるが、全容は不明である。黄褐色を呈する粘土～砂泥層を、底部が砂礫層に達するまで掘り抜いており、深さ1.3m前後を測る部分もある。土取土坑下半の堆積土中には、黄褐色粘土が採取されないまま大きなブロックでいくつも放棄されている。土坑壁面の観察では同層下部で、白色系のごく精良な粘土層の堆積が認められることから、粘土採集にあたって粘土の使用目的による選別が行われた可能性も考えられる。また、土取土坑上部の堆積層には、小石から拳大の石を大量に投げ込み、あたかも敷き詰めたような状況を呈する部分がある(図16)。泥沼状になった大穴の沈下を制御する地業の一種と考えられよう。図示した遺物には、瓦器羽釜37および図29の軒瓦類がある。この他土師器・瓦器・須恵器・須恵器系陶器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器・瓦など各時期・各種の遺物が出土している。石敷きの中から出土した遺物から、室町時代頃の土取土坑と推定できる。

土坑10 調査区西部で検出した。土坑10・11は土取土坑9埋没後の土坑と解釈した。東西約1.5m、南北約1.2m、深さ約0.2mを測る楕円形の土坑である。埋土は、10YR2/2 黒褐色砂泥である。土師器皿32が出土した。

土坑11 調査区西部で検出した。東西約1.3m、南北約1.7m、深さ約0.2mを測る楕円形の土坑である。埋土は、10YR3/4 暗褐色砂泥である。白磁碗35が出土した。

(5) 4区の遺構(図18・19、図版5)

検出した遺構には、竪穴住居3棟、掘立柱建物、溝、土坑などがある。竪穴住居は後世の削平が著しく、竈の基部を検出したことにより竪穴住居と判断した。また、3棟は重複して検出しており、規模の判明するものはない。竈の痕跡とみられる焼土は、3棟ともに北側の壁に沿って検出した。出土遺物は少なく、各住居の竈から土師器長甕の体部が出土している。

竪穴住居5(図21、図版5) 4区西側で検出した。竪穴住居6・7と重複しており最も新しい。南北約5mを測り、西側は調査区外となる。攪乱坑と重複し、床面は北側の一部で確認したに留まる。北側の東寄りの箇所焼土面を検出しており、竈の基底部とみられるが、削平されており詳細は不明である。柱穴は3箇所確認した。南北が2.5m、東西2mの間隔を測る。遺物は土師器甕の体部小破片が少量出土しており、飛鳥時代とみられる。

竪穴住居6(図21、図版5) 南側で竪穴住居5と、東側で竪穴住居7と重複する。西側は調査区外に延びる。北側で竈痕跡とみられる焼土面を確認するが削平を受ける。壁溝は検出していない。

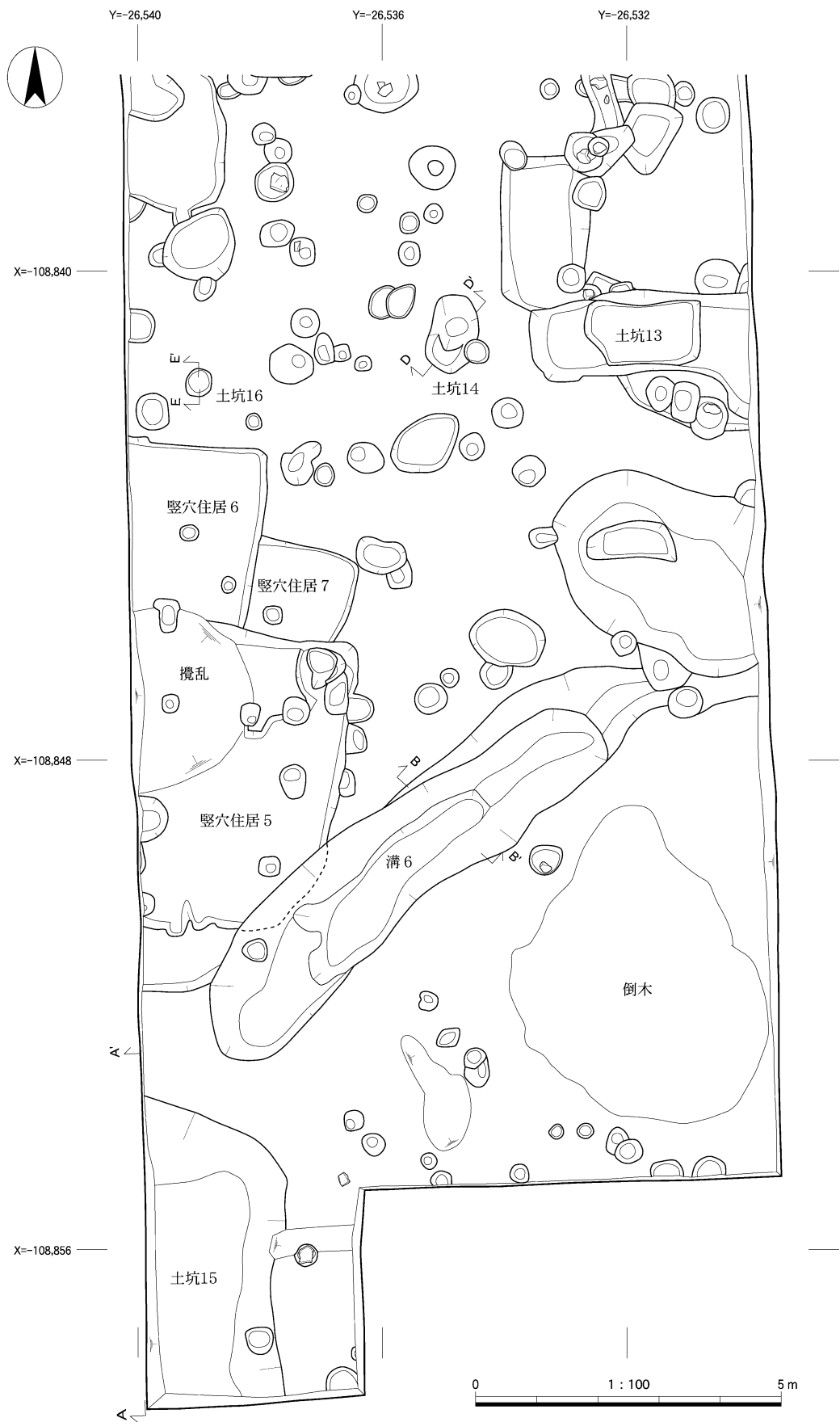


图 18 4区遺構平面図 (1 : 100)

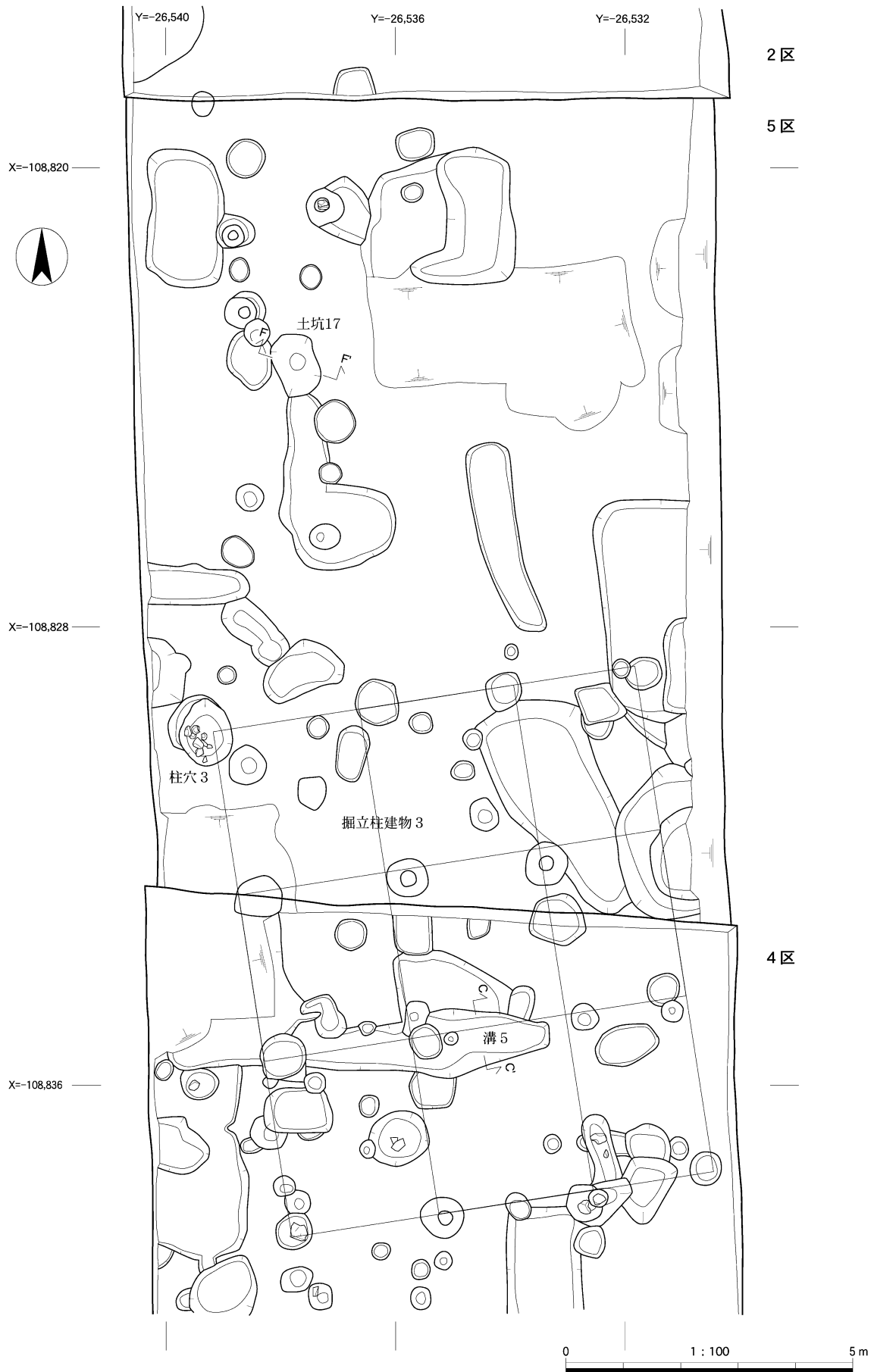


图19 4·5区遺構平面図(1:100)

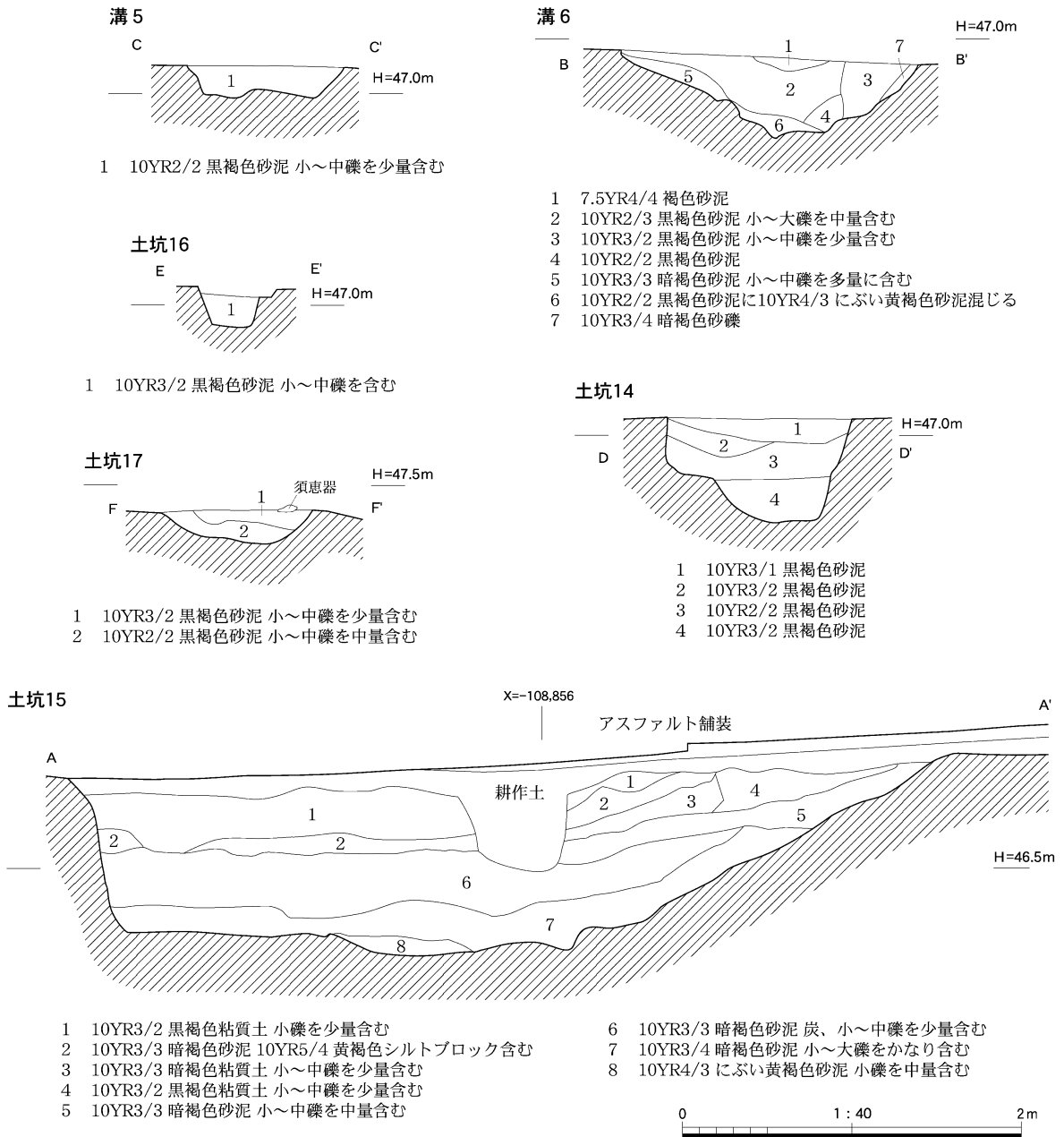
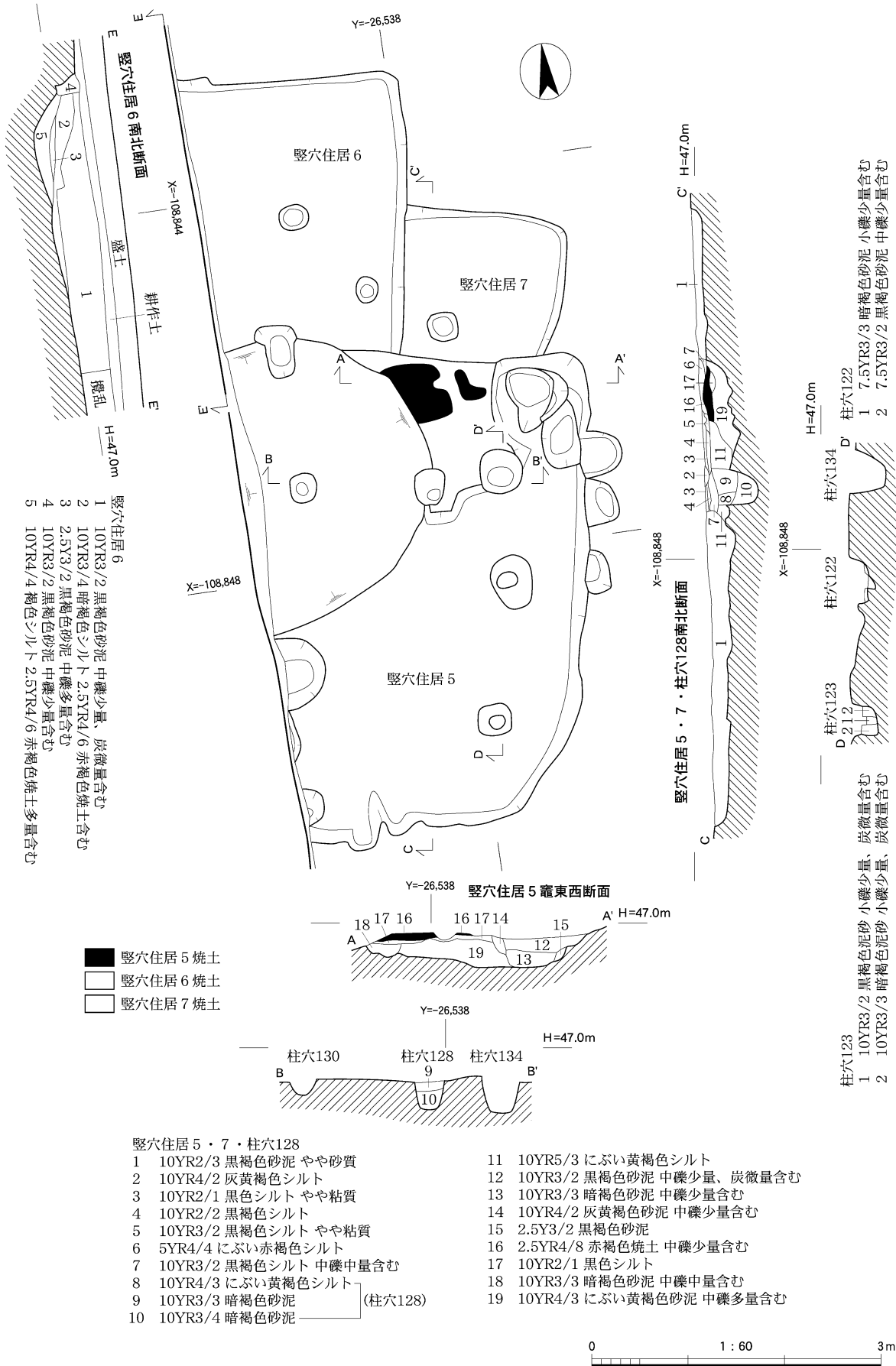


図20 4・5区溝5・6、土坑14～17断面図(1:40)

柱穴とみられるものを1箇所検出した。出土遺物はない。

竪穴住居7(図21、図版5) 竪穴住居5・6と重複し、北東隅を検出したに留まる。この住居も削平が著しく壁溝の検出はしていない。北壁の西側に延長した竪穴住居6床面下で薄い焼土層を検出しており、竪穴住居7に伴う竈とみられる。出土遺物はない。

掘立柱建物3(図22) 4・5区にまたがり検出した。3間×3間の総柱建物になるものとみられる。東西が約7.4m、南北8.9～8.7mを測り、やや歪である。柱間も2.2～3mと不揃いである。柱穴72・88には根石とみられる扁平な自然石を据える。N8°Wの傾きを持つ。南側柱列の柱穴88から「開元通寶」(64)が出土した。また、北西隅の柱穴3からは、土師器皿がまとまって出土しており、埋納遺構とみられる(図版6)。これらの土師器皿(図28)から安土桃山時代



- 竖穴住居 5 焼土
 竖穴住居 6 焼土
 竖穴住居 7 焼土
- 竖穴住居 5・7・柱穴128
- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1 10YR2/3 黒褐色砂泥 やや砂質 | 11 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト | 12 10YR3/2 黒褐色砂泥 中礫少量、炭微量含む |
| 3 10YR2/1 黒色シルト やや粘質 | 13 10YR3/3 暗褐色砂泥 中礫少量含む |
| 4 10YR2/2 黒褐色シルト | 14 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 中礫少量含む |
| 5 10YR3/2 黒褐色シルト やや粘質 | 15 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 |
| 6 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト | 16 2.5YR4/8 赤褐色焼土 中礫少量含む |
| 7 10YR3/2 黒褐色シルト 中礫中量含む | 17 10YR2/1 黒色シルト |
| 8 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト | 18 10YR3/3 暗褐色砂泥 中礫中量含む |
| 9 10YR3/3 暗褐色砂泥 (柱穴128) | 19 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 中礫多量含む |
| 10 10YR3/4 暗褐色砂泥 | |
- 柱穴123
 D 212
 柱穴123 10YR3/2 黒褐色砂泥 中礫少量、炭微量含む
 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 中礫少量、炭微量含む
- 柱穴122
 D
 柱穴122 10YR3/2 黒褐色砂泥 中礫少量含む
 2 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 中礫少量含む
 1 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 中礫少量含む
- 柱穴134
 D
 柱穴134 10YR3/2 黒褐色砂泥 中礫少量含む
 2 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 中礫少量含む

図 21 4区竖穴住居 5～7 実測図 (1:60)

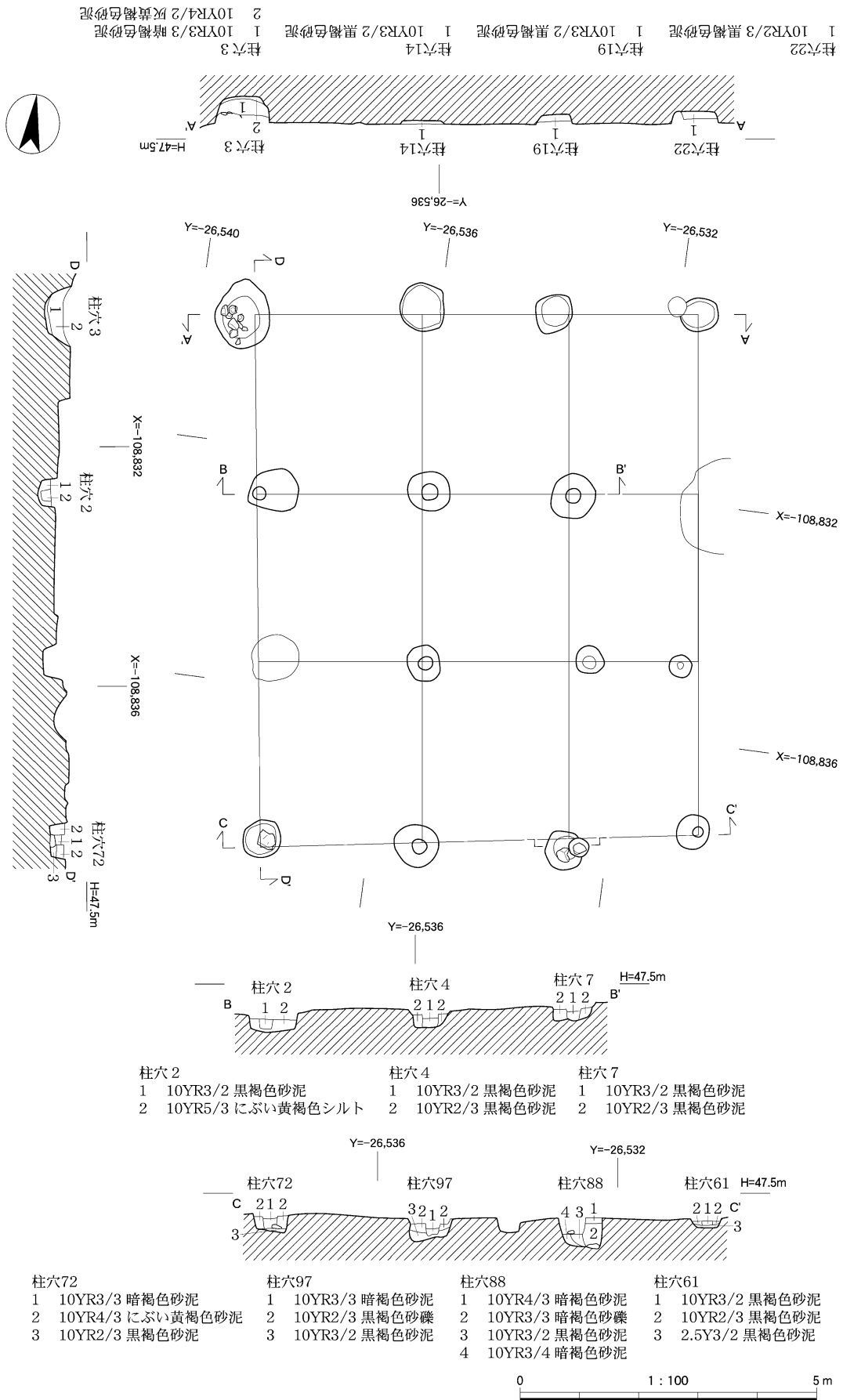


図 22 4・5区掘立柱建物3実測図 (1 : 100)

と考えられる。

溝5 (図20) 4区北側で検出した東西方向の溝。掘立柱建物2に切られる。約4.5mを検出した。検出面の幅0.9m、深さ0.2mある。埋土は黒褐色砂泥の単層で出土遺物はない。

溝6 (図20) 4区南半で検出した。竪穴住居5を切る。検出面での幅1.78m、深さ約0.42mある。埋土は黒褐色～暗褐色の砂泥層で、北東から南西にやや湾曲して約11mにわたり検出した。古墳時代後期の土師器甕4・須恵器甕8が出土している。

土坑15 (図20、図版5) 4区の南端で検出した。東西2m以上、南北4.8m以上、深さ約1

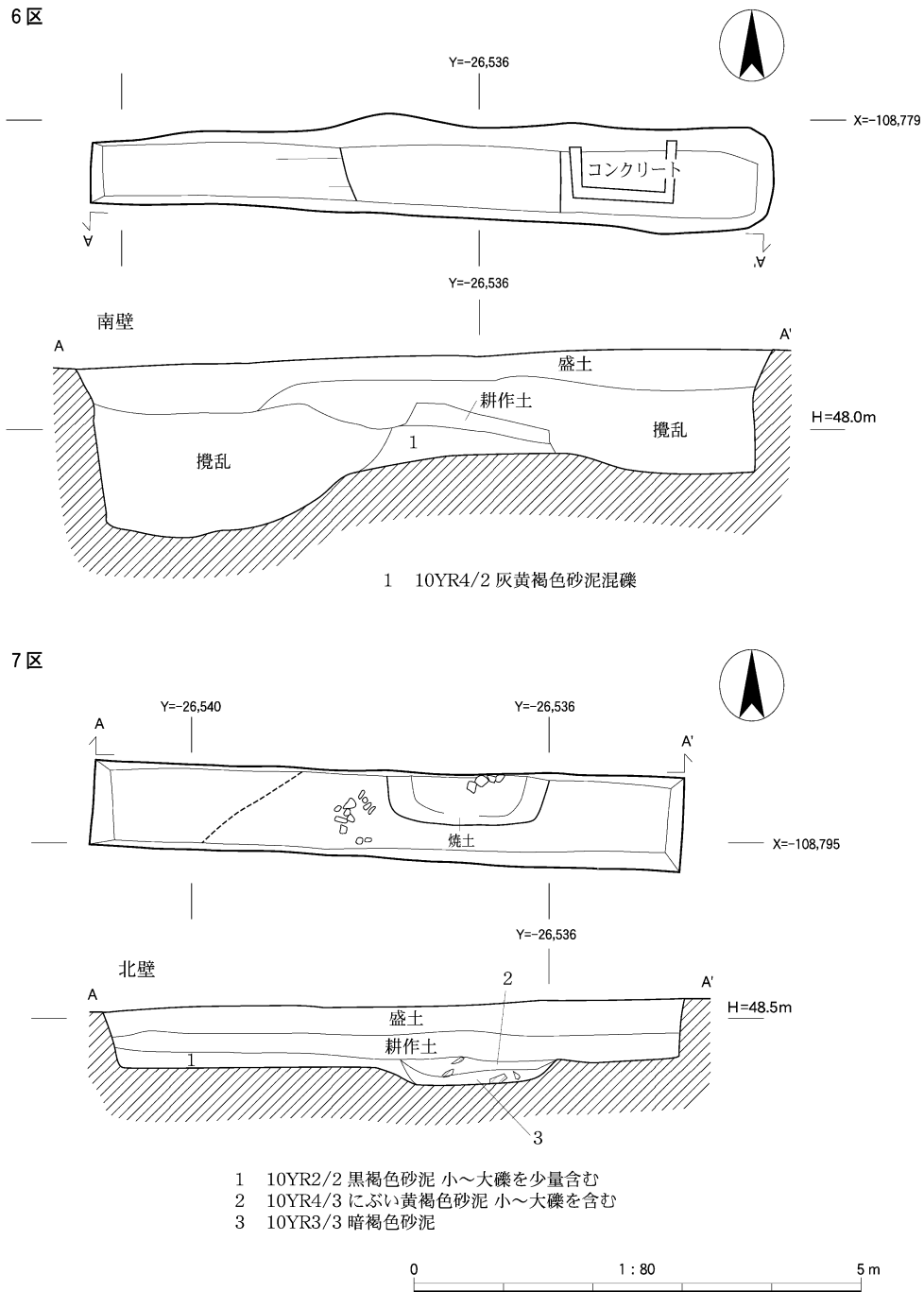


図23 6・7区遺構実測図 (1:80)

mの規模を持つ。埋土は暗褐色砂泥～粘質土で拳大の角礫を含む。また、上層および中層に炭・焼土を含む。遺構の性格は不明であるが、飛鳥時代の土師器・須恵器が比較的多く出土している(図25)。

土坑16(図20) 4区で検出した。径0.42m、深さ0.2mの規模を持つ。埋土は黒褐色砂泥層で土師器、須恵器の小破片と「元豊通寶」(65)が出土した。

(6) 5区の遺構(図19、図版6)

土坑、柱穴を検出した。4区検出の柱穴と併せて、掘立柱建物3となった。

土坑17(図20) 5区北西部で検出した。東西約0.7m、南北約1.1m、深さ約0.2mの規模を持つ不定形な土坑である。埋土は黒褐色砂泥層で土坑の底部は平坦ではなく凹凸がある。土坑検出面で古墳時代の須恵器杯身7一個体が出土している。

(7) 6区・7区の遺構(図23、図版7)

調査着手以前に、移転された民家があり、既にガス・下水などの配管がなされている。また、その生活道路確保のため、調査方法の検討が行われ、トレンチ調査が実施されることになった。

6区はトレンチ幅1m、長さ約7.8mで調査を実施した。深さ約2mまで掘削したが簡易浄化槽により大半が攪乱を受けていた。

7区はトレンチ幅1m、長さ約6.6mで調査を実施した。深さ約0.7mで、2区の遺構面に類似した褐色を呈する砂礫混じりの砂泥層を確認した。同層上面で北壁に沿って東西約1.7m、南北0.5m以上とみられる焼土を含む土坑を検出した。遺物が出土しておらず、時期不明である。

4. 遺 物

出土遺物には、土器類・瓦類・石製品・金属製品などの種類がある。出土遺物の大部分は土器類が占める。土器類には弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、飛鳥時代の土師器・須恵器、平安時代以降の土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・須恵器系陶器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などがある。

(1) 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物には、土器と石製品・金属製品がある。すべて1区から出土した。これらの遺物は第1層掘り下げ中または遺構検出中に出土したもので、遺構に伴って出土したものはない。

土器（図24、図版8）1は台付壺（鉢）の脚台部である。底部径13.9cm、脚の高さ約6cmある。脚部から体部にかけての縊れ部に幅約0.4cmの沈線を2条施す。端部近くに連続して10箇所穿孔

する。脚部外面はタテ方向のケズリ。内面はオサエナデ。脚端部はナデを施す。わずかであるが朱彩の痕跡が認められる。

石製品（図30、図版9）55は石包丁である。半月形の破片で片側を欠損する。背・刃部共に使用による刃こぼれがみられ、刃部は直線的で背部は大きく外弯する。紐孔は2箇所あり、両側

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器、石製品、銅製品		弥生土器1点、石製品2点、銅製品1点	0箱	0箱
古墳時代	土師器、須恵器、ガラス製品、土製品		土師器3点、須恵器4点、ガラス製品1点、土製品1点	1箱	0箱
飛鳥時代 ～奈良時代	土師器、須恵器		土師器8点、須恵器7点	2箱	0箱
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、軒瓦		軒平瓦4点	1箱	1箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、須恵器系陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、軒瓦、丸瓦、平瓦、石製品、銭貨		土師器7点、瓦器2点、輸入陶磁器3点、軒丸瓦1点、石製品2点、銭貨2点	2箱	21箱
安土桃山時代	土師器		土師器11点	1箱	0箱
江戸時代	土師器、施釉陶器、染付、焼締陶器、軒瓦、銭貨		土師器2点、銭貨3点	1箱	11箱
合 計		46箱	65点（5箱）	8箱	33箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より6箱多くなっている。

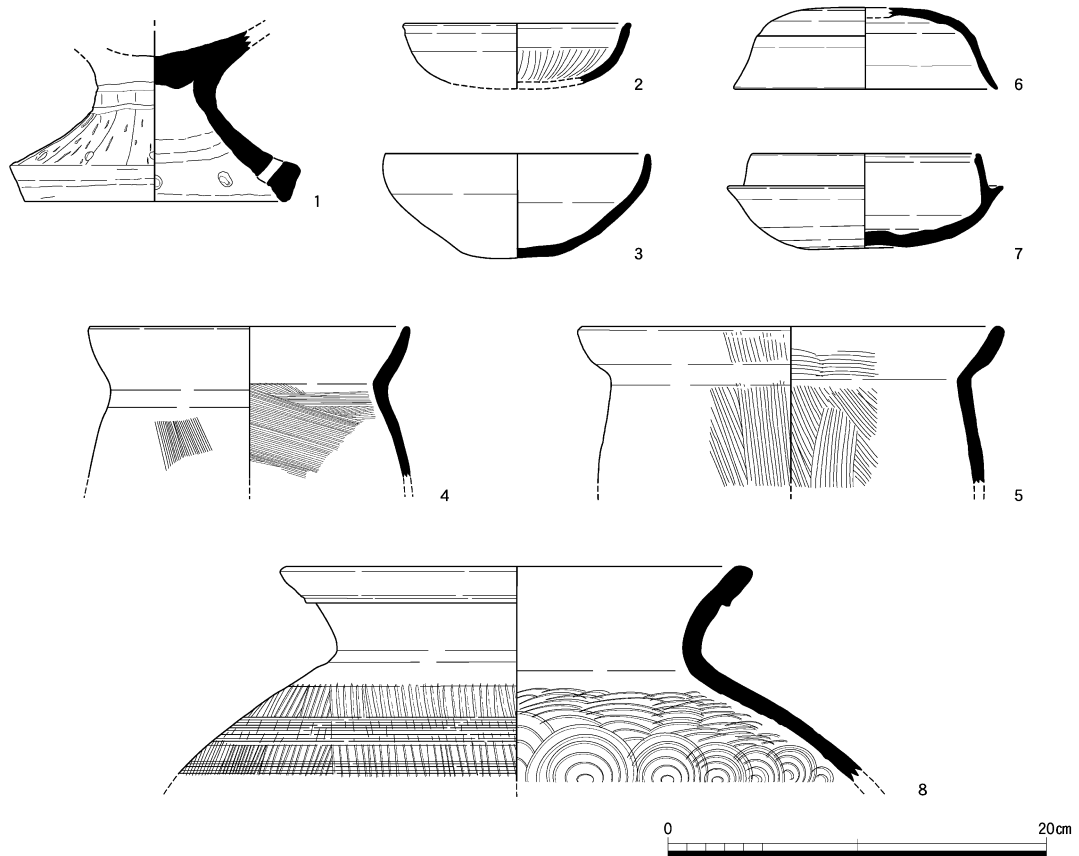


図 24 弥生時代から飛鳥時代の出土土器実測図（1：4）

から尖孔し、器面は丁寧に磨かれている。材質は粘板岩とみられる。54は円盤形石製品である。直径 3.7 cm、厚さ 0.8 cmを測る。側面を含め丁寧に磨き、ほぼ正円を呈す。用途は不明である。石材は頁岩～粘板岩とみられる。

銅製品（図 30、図版 9） 58は銅鏃である。残存長 3.2 cmあり、先端部は欠損するが、茎の長い柳葉形とみられる。中央部に孔が認められ、いわゆる有孔銅鏃である。

（2）古墳時代の遺物

古墳時代の遺物には、土師器・須恵器の他、横穴式石室出土の土製丸玉・ガラス小玉がある。

土器（図 24、図版 8・9）土師器は椀（3）・甕（5）、須恵器は杯蓋（6）・杯身（7）がある。この時期に該当する土器類は出土量が少なく、これ以外には 10 数点がみられるのみである。土師器椀（3）は 2 区の横穴石室を覆う黒褐色砂泥を精査中に出土したものである。この古墳は著しい破壊を受けていることから、黒褐色砂泥にも近・現代の遺物が混入しており、この椀が古墳に伴うものであるかは明確でない。6 世紀前半代に位置するものと考えられる。土師器甕（5）は長胴甕である。1 区竪穴住居 3 北側の壁溝から出土した。6 世紀後半代に位置するものと考えられる。須恵器杯蓋（6）は 1 区竪穴住居 1 の床面から出土した。TK10 併行期頃かと考えている。須恵器杯身（7）は 5 区土坑 17 から出土したものである。MT15 併行期頃かと考えている。

横穴式石室礫床出土の遺物（図 30、図版 9）石室床面の土を持ち帰り、洗浄した結果 2 点の玉

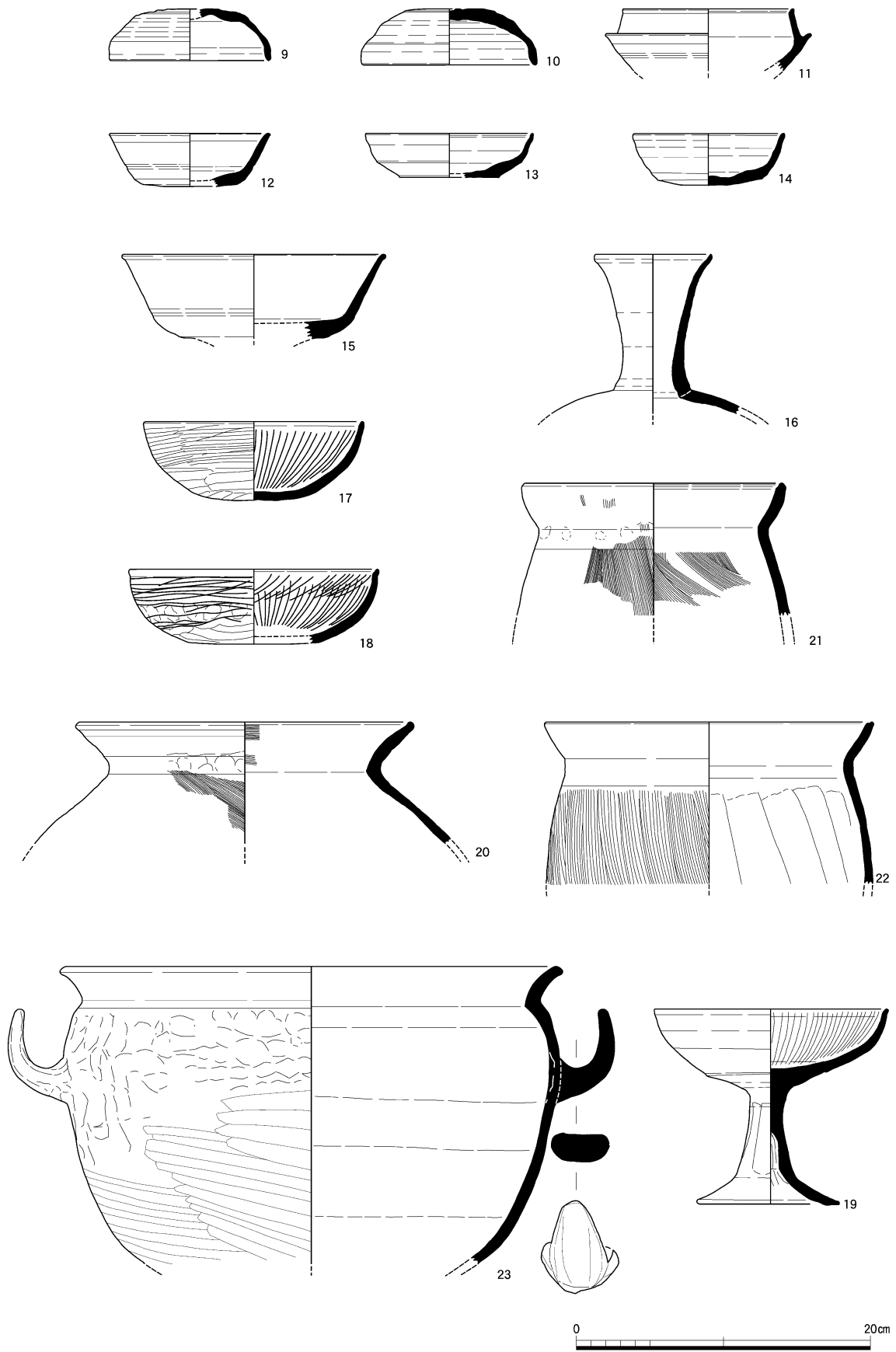


图 25 4区土坑 15 出土土器实测图 (1 : 4)

(59・60) を検出することができた。59 は土製丸玉で長 0.6 cm、幅 0.7 cm あり。上孔・下孔とも 0.1 cm で針金状の細い棒を通し整形したものとみられ、穿孔した痕跡はない。孔部分は地の色調を見せるが、他は漆黒に処理されている。漆とみられるが、分析をしていないので漆か否かは不明である。60 はガラス小玉の破片である。二次的に火を受け溶解しているが、わずかに孔を確認することができ、ガラス玉と判断した。

(3) 飛鳥時代の遺物

飛鳥時代の遺物には、土師器、須恵器がある。

土器 (図 24・25、図版 8・9) 土師器は杯 (2)・高杯・鍋・甕 (4)、須恵器は杯蓋・杯身・高杯・長頸壺・甕 (8) などがある。土師器杯 (2) は竪穴住居 4 から出土した。内面に放射状暗文を施し、外面は口縁部をナデ、底部をオサエで調整するものである。7 世紀後半代に位置するものと考えられる。竪穴住居の終末期を示すものであろうか。土師器甕 (4)、須恵器甕 (8) は 4 区溝 6 から出土した。

4 区南端の土坑 15 から同期を主体とした土器群 (9～23) が出土しており、図 25 に示した。土師器杯 (17・18)、土師器高杯 (19) は内面に放射状暗文を施す。杯はいずれも丸味を持った器形で、外面下半をヘラケズリ、上半に密なヘラミガキを施す。18 は 2 段の放射状暗文を持つものである。高杯 (19) は椀状の杯部の外面をナデで調整するものである。形式的にやや古い様相を留めるものの、杯部と脚柱部の接合や器表の調整などに粗雑さがみられる。土師器甕 (20～22) は、20 が球形の胴部を、21・22 は寸胴形の胴部を持つものとみられる。土師器鍋 (23) は球形の胴部に広口が付くもので、胴部最大径付近に把手をもつ。須恵器杯蓋 (9・10) は天井部が丸味を持つものである。11～14 は須恵器杯身で、図示した受部のないもの (12～14) のほか、短い立ち上がりを受部を持つものの小片がある。これらの杯蓋・杯身は、杯身 (11) を除き、TK217 併行期頃と考えられる。須恵器高杯 (15) は、平坦な底部内面から口縁部が撥状に開く、体部外面に 1 条の凹帯が廻る。この他、須恵器長頸壺 (16) が出土している。

(4) 平安時代以降の遺物

平安時代以降の遺物には、土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・須恵器系陶器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などの他、瓦類、石製品、銭貨がある。平安時代後期とみられる溝、鎌倉時代の井戸・土坑および室町時代の土取土坑など各調査区で数多の遺構を検出しているが、遺物がまとまって出土する遺構はわずかである。

土器 (図 26～28、図版 8・9) 井

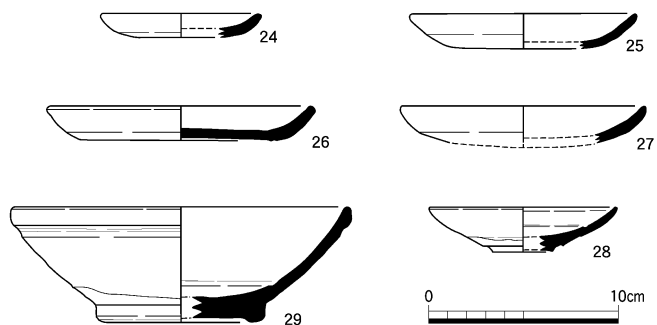


図 26 1・3 区井戸 1 出土土器実測図 (1:4)

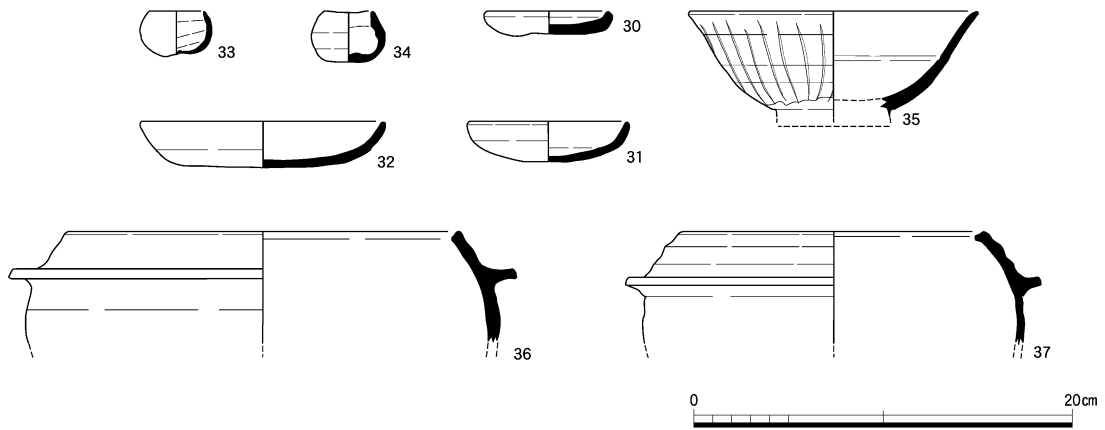


図 27 中世から近世の出土土器実測図（1：4）

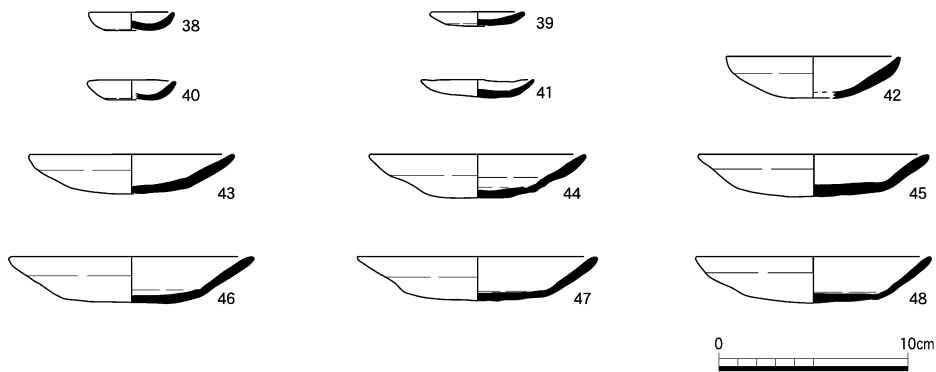


図 28 5区柱穴3出土土器実測図（1：4）

戸1出土の遺物には、土師器小皿（24）・大皿（25～27）、輸入陶磁器の白磁皿（28）・白磁椀（29）の他に、石製品の温石（図30-56）、硯（57）がある。土器を図26に示した。土師器皿はいずれも扁平な底部と短く立ち上がる口縁部を有するもので、口縁部内外面に1段のナデを施す。白磁皿（28）は削り出しの小さな平高台と緩やかに内湾する体部を、白磁椀（29）は削り出しの輪高台と玉縁の口縁部を有するものである。13世紀中頃に位置するものと考えられる。

図27にはその他の遺構出土の土器を取り上げた。土師器皿（30）は1区第1層から出土した。いわゆるコースター形を呈している。土師器小皿（31）は、井戸1掘形の北東部に接して穿たれた円形の土坑12の底部中央から伏せた状況で出土した。井戸1の地鎮の可能性も考えられる。土師器皿（32）は3区土坑11から出土した。土師器小壺（33）は1区土坑3から、（34）は4区土坑13から出土している。いずれも手捏の土製品である。白磁椀（35）は3区土坑11から出土した。瓦器羽釜（36）は1区土坑4、瓦器羽釜（37）は3区の土取土坑9から出土した。三足釜の可能性もある。

図28には5区柱穴3出土の土師器皿を取り上げた。土師器小皿（38～41）は粗雑な造りで内面のみナデる、歪みも大きい。土師器大皿（42～48）はナデのみで圈線を成さないものと、強い圈線を形成するものがある。これらは正位の状態で数枚ずつ重なった状態で出土した。16世紀後半代に位置するものと考えられる。

瓦（図 29）量的には些少であるが、平安時代中期から江戸時代に至る各時代の瓦が出土している。瓦類の大半は 3 区の土取土坑 9 上部の石敷きから出土したものである。軒瓦を図示した。

49 は巴文軒丸瓦である。瓦当面に離れ砂の痕跡、裏面に接合のための強い指頭圧痕が残る。胎土は密で若干の白の砂～小石を含む。やや軟質である。土取土坑 9 から出土した。

50 は唐草文軒平瓦である。右辺部が遺存する。瓦当面に版木の木目が残る。下顎部は粘土貼り付け、ヘラと指圧で圧着の後、下顎部を横方向にヘラケズリする。凹面には細かい布目痕が残る。胎土はやや密さを欠き、砂～直径 5 mm 大の石を含む。焼成は良好である。土取土坑 9 から出土した。51 は唐草文軒平瓦である。瓦当面は裏面に平瓦を差し込んで成形する。顎部はオサエ・ナデで圧着したのち下顎部をヘラケズリする。凹面に布目痕が残る。胎土は砂～小石を多量に含み粗い。焼成は良好で須恵質の質感を持つ。播磨系の製品と考えられる。土取土坑 9 から出土した。50・51 は平安時代後期に位置するものと考えられる。

52 は唐草文軒平瓦である。右辺部が遺存する。文様部分の盛り上がりがごく低い。顎部は粘土を盛りつけて成形する。裏面に強い指圧痕残る。下顎部・側面はヘラケズリである。凹面には細かい布目痕が残る。胎土は砂～小石を若干含むが、密である。焼成はやや甘い。土取土坑 9 から出土した。栗栖野近辺の瓦窯の製品の可能性がある。53 は唐草文軒平瓦である。左辺部が遺存する。瓦当面に顎部成形時の粘土圧着の甘さに起因する大きな横方向のひび割れを持つ。顎部裏面・下顎部・側面ヘラケズリである。凹面は瓦当面から 4 cm 程粘土を貼り付けており、その先に粗い

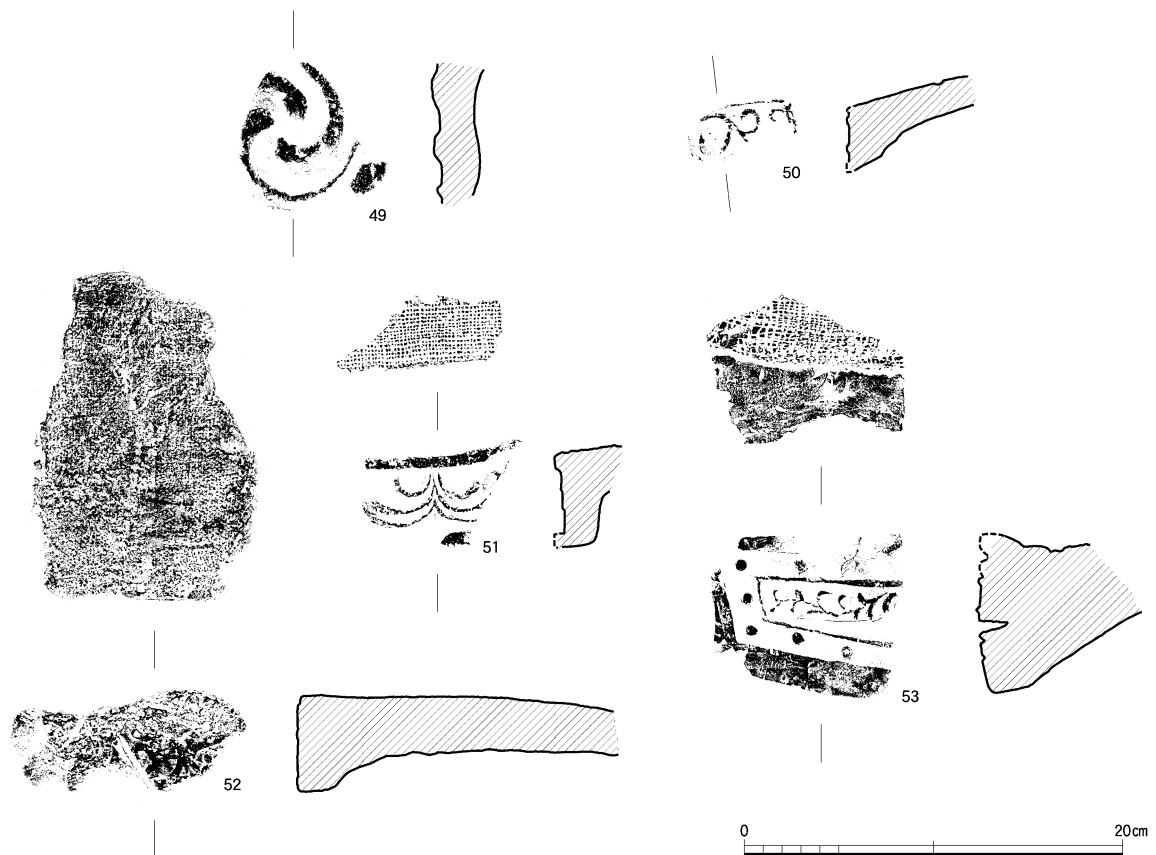


図 29 出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

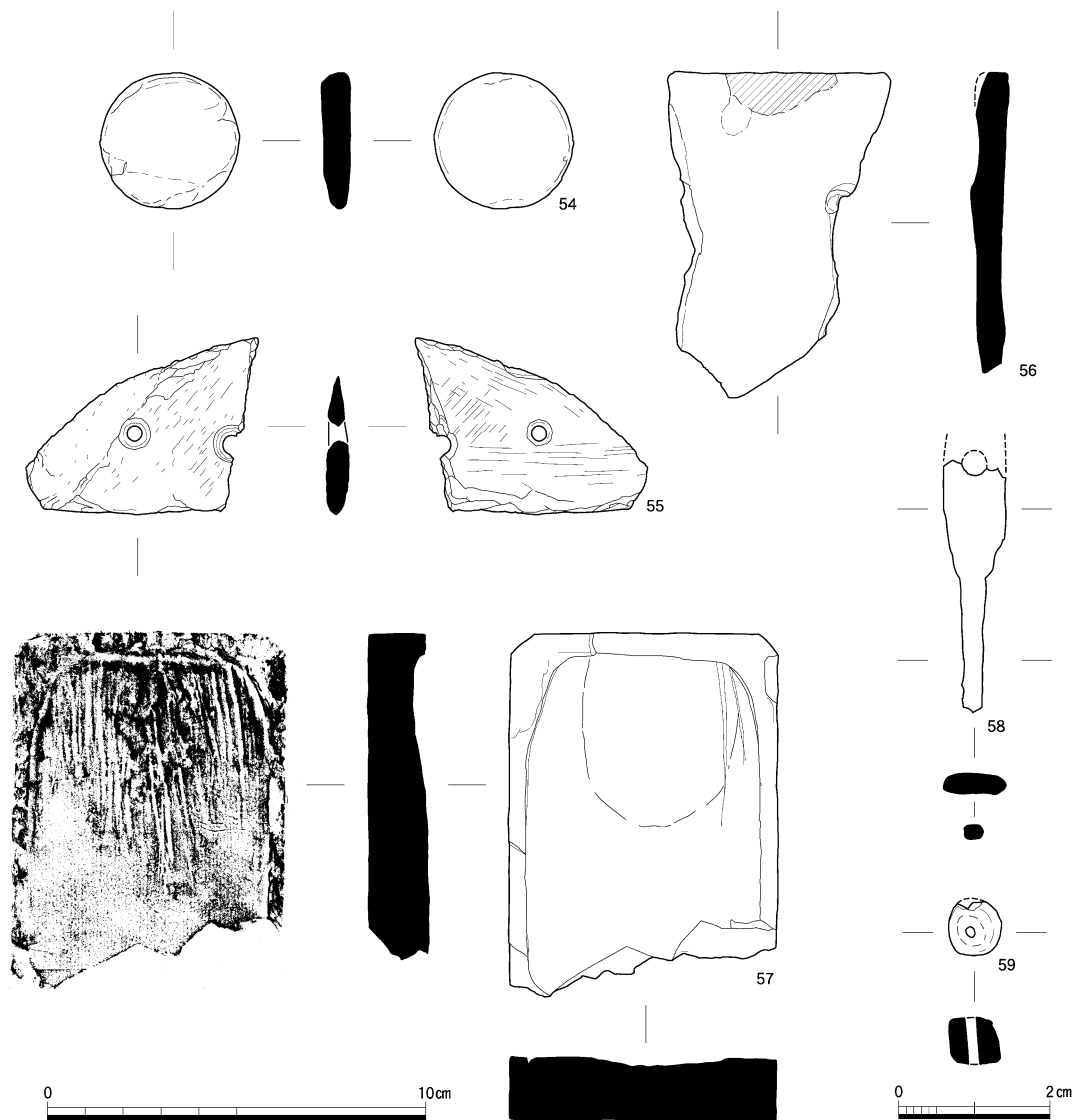


図30 出土石製品、金属製品、土製品拓影・実測図（1：2、58・59のみ1：1）

布目痕が残る。胎土は砂をわずかに含むが、緻密である。焼成は良好で須恵質の質感を持つ。土取土坑9から出土した。調査地近辺の瓦窯、森ヶ東瓦窯あるいは河上瓦窯の製品の可能性がある。52・53は平安時代中期に位置するものと考えられる。

石製品（図30）大半が砥石の破片である。このほか滑石製羽釜と硯の破片がある。ここでは前述の井戸1出土の温石・硯を取り上げる。

温石（56）は滑石製の鍋を転用したものとみられ、表面には煤が付着し、内面はわずかに湾曲している。割れ口は雑に削り形を整える。残存長8.6cm、最大幅5.8cmを測る。1箇所孔が認められる。硯（57）は石材が粘板岩で、破損後砥石に転用したものとみられ、縦方向に無数の細かい溝が認められる。

銭貨（図31）銭貨は図31に図示したものがすべてである。

61～63は「寛永通寶」である。61・62は1区の第1層から出土。63は1区土坑3から出土した。64は唐銭で「開元通寶」である。4区掘立柱建物3、南側柱列の柱穴88から出土した。65は北

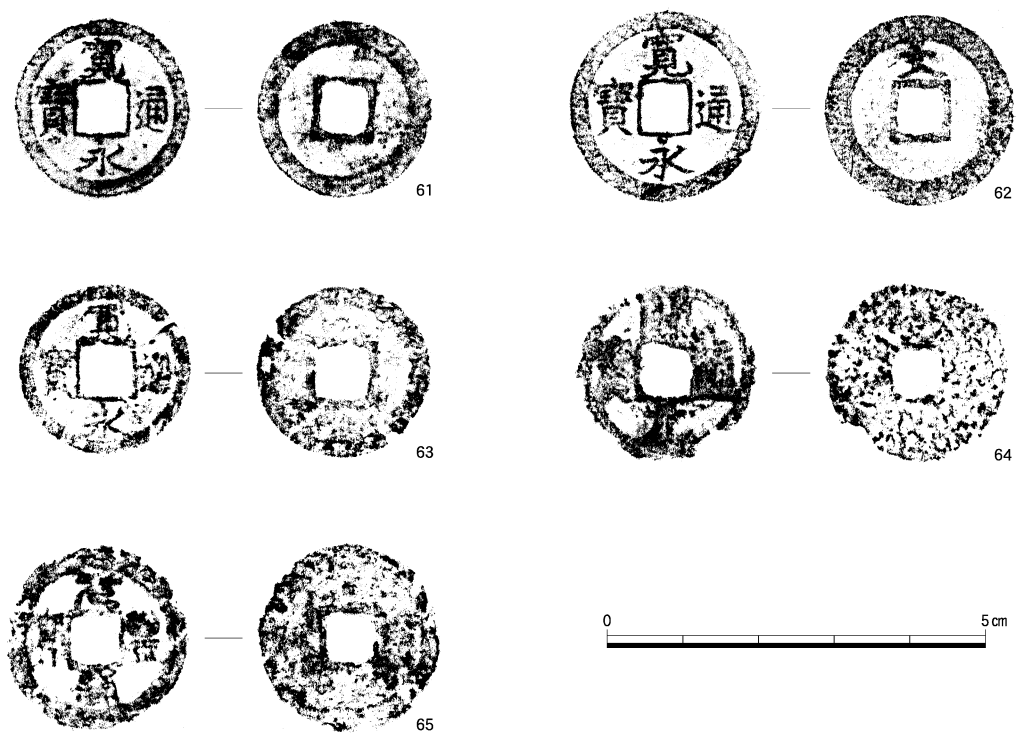


図 31 出土銭貨拓影 (1 : 1)

宋銭で「元豊通寶」である。4区土坑 16 から出土した。

5. ま と め

今回の調査対象地は、3基の円墳を検出した常盤東ノ町古墳群に西隣すること、多数の竪穴住居・掘立柱建物などを検出した常盤仲之町遺跡の北東に位置すること、さらには山陰線高架工事に伴う発掘調査で確認した古墳時代から飛鳥時代の竪穴住居などから、古墳時代を中心とする遺構群の検出が期待できる位置にあった。調査の成果として1・4区の竪穴住居、2区の横穴式石室をはじめ土坑・溝など、古墳時代から飛鳥時代の遺構を多数検出することができた。

2区で検出した横穴石室は常盤東ノ町古墳群と一連のものと考えられ、これまでの発掘・試掘並びに分布調査などで確認していた古墳に新たな1基が加わったものと評価できる。墳丘規模・石室構造は確認できなかったものの、石室掘形の規模は比較する対象と成りうると考える。

	掘形長(南北)	掘形幅(東西)	玄室内石敷の幅	羨道部の幅
常盤東ノ町1号墳	約8.4 m	約3 m	約1.6 m	0.8～1 m
常盤東ノ町2号墳	約8.5 m	約3.1 m	約1.7 m	不明
常盤東ノ町3号墳	約10 m	約4 m	不明	不明
今回の横穴石室	約8.5 m	3～4.6 m	約2 m	約1 m

以上のように、掘形などは類似した数値を示しており、同等の墳丘規模・石室を有していたものと推定できる。常盤東ノ町1号墳は石室内に小～中礫を密に、2号墳では石室内に扁平な中～大礫をあたかもタイル状に敷き詰めている。今回検出の石室は小～中礫を密に敷き詰めたもので、側壁部では石の抜き跡に沿って敷石が方向を揃えて並ぶ様子が数箇所観察できた。また、周溝はこの古墳が直径14～18 m級のものであれば、溝3または溝4がその候補として挙げられよう。

竪穴住居は7棟検出した。1棟を除き飛鳥時代に収まると考えられる。これまでは、城北街道の西側のみで竪穴住居を検出しており、墓域と住居域の棲み分けがあるものと想定していた。ところが今回は古墳に隣接して竪穴住居を検出している。これが当該地だけの現象なのか、この時期普遍的に行われていたものなのか今後の類例を待ちたい。

今回の調査では、道路とも解釈できる平安時代後期の遺構(溝1・2)をY=-26,536付近で検出している。2008年度の山陰線高架工事に伴う発掘調査の5-1区では、旧城北街道側溝とみられる南北溝(溝453)を検出している。この溝はY=-26,530の位置にあり、今回検出した溝がその傾きを維持すればかなり西に寄ることになるが、溝453は層序から鎌倉時代のもものと報告されていることから、これらは一連の溝である可能性も考えられる。

このほか、これまでの周辺の調査同様に鎌倉時代から江戸時代にかけての井戸・掘立柱建物・土坑など各種の遺構を検出している。

平安京遷都を遡ること数百年、雄族「秦氏」が嵯峨野・太秦の地に本拠を置き、同地域一帯の開発・繁栄がもたらされていく。今回の調査地もその一環に含まれることは紛れもない。さらには平安京遷都後も、連綿と検出される遺構が尽きないことは、当該地周辺が現在に至るまで常に生活の場として受け継がれてきたことを示すものであろう。

表4 出土土器観察表

遺物番号	調査区	遺構名	種別 器種	口径 器高 底径	色調 胎土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
1	1区	第1層	弥生土器 台付き壺	(-) (6.0) 13.9	7.5YR7/3 にぶい橙色 胎土：10YR6/4 にぶい黄橙色～ 10YR8/3 浅黄橙色 赤・白の砂～小石を多量に含む。密 やや甘い	脚部はラッパ状に広がり、端部に至り肥厚する。外面を縦方向のヘラケズリ。端部をナデ。内面はオサエナデを施す、絞りと壺部接合のためのカキヤブリ痕が明瞭に残る。端部近くに10箇所穿孔。		脚部のみ
2	1区	竪穴 住居4	土師器 杯	12.0 (3.2)	5YR6/8 橙色 白の砂をかなり含む。密 良好	緩やかに内湾する体部・口縁部が端部に至り小さく外傾する。口縁部内外面をナデ。外面下半をオサエ。内面に放射状暗文を施す。	1/8	
3	2区	黒褐色 砂泥	土師器 碗	14.2 5.6	7.5YR8/3 浅黄褐色 白の細砂～小石、赤の細砂を若干含む。密 良好	小さな底部から内湾気味に立ち上がり口縁部に至り直立する。口縁部は丸くおさめる。外面上半はナデで時計回りにナデを引き上げる。下半はオサエ、底部付近では指頭痕が廻る。内面は底部中央付近を除き全体をナデ。	2/3	TK10併行 期頃か
4	4区	溝6	土師器 甕	17.0 (8.0)	2.5YR8/3 浅黄色 白・黒の砂を若干含む。密 良好	口縁部はやや内湾気味に外傾する。端部は丸くおさめる。口縁部内外面をナデ。胴部外面を細かい縦方向のハケ、内面を横方向のハケを施す。	口縁部 破片	
5	1区	竪穴 住居3	土師器 甕	22.5 (8.2)	7.5YR8/3 浅黄褐色 白・黒・赤の砂を含む。密 良	外傾する口縁部は次第に肥厚する。口縁部内面を横方向のハケ、外面はナデの後ハケ。胴部外面を縦方向のハケ、内面に斜め方向を主体としたハケを施す。	口縁部 1/8	
6	1区	竪穴 住居1	須恵器 杯蓋	14.1 4.3	5PB5/1 青灰色 白の細砂を多量に含む。やや粗い 良好、堅緻	扁平な天井部に緩やかに外傾する体部が続く。口縁部はやや外反する。端部は丸くおさめる。外面天井部を回転ヘラケズリ、天井部と口縁部の境にかすかな稜線がみられる。	1/5	TK10併行 期頃か
7	5区	土坑17	須恵器 杯身	14.6 5.0	N7/ 灰白色 白・黒の砂を多量に含む。ガサガサ した感じでやや粗い。 良好、堅緻	底部は丸味を持つ。受け部は外上方へつまみ出す。立ち上がりはやや内傾し、口縁部は内側に段を有する。底部外面は時計回りの回転ヘラケズリ。外面に自然釉。	2/3	MT15併行 期頃か
8	4区	溝6	須恵器 甕	22.5 (8.2)	10Y6/1 灰色 胎土：10YR6/3 にぶい黄褐色 白の砂～小石をかなり含む。黒の砂 も若干含む。密 良	外傾する口縁部は、端部を外側で折りたんで肥厚させ玉縁状に成形する。口縁部内外面をロクロナデ。胴部外面を平行タキで調整、肩口部付近をハケ状工具で回転スリ消し。内面に同心円文の当て具痕が残る	口縁部 のみ	TK217併 行期頃か
9	4区	土坑15	須恵器 杯蓋	11.0 3.5	5Y6/1 灰色 白・黒の細砂を若干含む。緻密 良好、堅緻	丸味を持った天井部はヘラ切りのまま。体部の器肉は薄い。下方にまっすぐ引き出された口縁部は端部付近でやや肥厚する。	1/6	TK217併 行期頃か
10	4区	土坑15	須恵器 杯蓋	12.0 3.8	2.5Y6/1 黄灰色 白の砂～小石をかなり含む。やや粗 い。 良好、堅緻	丸味を持った天井部を時計回りに回転ヘラケズリするが、中央部付近は未調整。下方にまっすぐ引き出された口縁部は端部付近で肥厚し、端部はやや外傾する。	1/4	TK217併 行期頃か
11	4区	土坑15	須恵器 杯身	14.0 (4.2)	N5/ 灰色 白・黒の砂～小石を若干含む。密 良好、堅緻	受け部は外上方に短く延び、端部は丸くおさめる。立ち上がりはやや内傾し、端部に至って上方につまみ上げ丸くおさめる。底部外面をヘラケズリ、口縁部内外面に回転ナデを施す。	1/10	TK10併行 期頃か
12	4区	土坑15	須恵器 杯身	11.0 3.6	10YR6/1 褐灰色 胎土：7.5YR6/2 灰褐色 白の細砂を若干含む。緻密 良好、堅緻	ほぼ扁平な底部から体部が外傾して立ち上がり、口縁部に至り小さく外方へ引き出し丸くおさめる。底部外面をヘラナデ、口縁部内外面に回転ナデを施す。	1/10	TK217併 行期頃か
13	4区	土坑15	須恵器 杯身	11.5 3.0	10YR5/1 褐灰色 胎土：7.5YR6/3 にぶい褐色 白の細砂を若干含む。緻密 良好	ヘラ切りのままの扁平な底部から体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至って上方につまみ上げ丸くおさめる。口縁部内外面に回転ナデを施す。	2/5	TK217併 行期頃か
14	4区	土坑15	須恵器 杯身	10.4 3.6	N5/ 灰色 白・黒の砂～小石をかなり含む。密 良好、堅緻	やや丸味を帯びた底部から体部が外傾して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。底部外面はヘラケズリのまま、口縁部内外面に回転ナデを施す。	4/5	TK217併 行期頃か
15	4区	土坑15	須恵器 高杯	18.0 (5.7)	10YR5/1 褐灰色 胎土：5Y5/2 灰褐色 白の細砂～小石をかなり含む。緻密 良好、堅緻	外傾する体部と口縁部は端部に至り、外方に小さくつまみ出し丸くおさめる。体部外面中程に1条の凹帯を廻らす。口縁部内外面に回転ナデを施す。	杯部 1/10	
16	4区	土坑15	須恵器 壺	8.0 (10.8) (-)	2.5Y7/1 灰白色 白の細砂を若干含む。緻密 良好	口縁部は緩やかに外傾しながら上方へ立ち上がり、端部に至って短く上方につまみ上げる。口縁部内外面に回転ナデを施す。	口縁部 1/4	
17	4区	土坑15	土師器 杯	15.0 5.4	5YR7/8 橙色 赤・白の細砂をかなり含む。密 やや不良、磨滅気味	丸味を持った底・体部から口縁部は上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。外面下半をヘラケズリ、上半をヘラミガキする。内面は放射状暗文を施す。	1/4	
18	4区	土坑15	土師器 杯	17.0 (5.0)	2.5YR6/8 橙色 白・赤の細砂をわずかに含む。緻密 良好	丸味を持った底・体部から口縁部は上方に立ち上がり、端部に至って外方に短く引き出す。端部は丸くおさめる。外面下半をヘラケズリ、上半をヘラミガキする。内面は2段の放射状暗文を施す。	1/3	

遺物番号	調査区	遺構名	種別器種	口径器高底径	色調胎土焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
19	4区	土坑15	土師器高杯	16.0 13.3 9.7	5YR6/8 橙色 白の細砂を多量に含む。密良好	杯部は丸味を帯びた椀状を呈する。口縁部は端部に至り外方に小さく屈曲する。端部は丸くおさめる。脚柱部は棒状で細く、七角形の粗雑な面取りが施される。杯部外面下半に低い稜を持つが、杯部接合時の歪みのため稜をなさず部分的に器壁に埋没する。杯部内面に放射状暗文を施す。外面は杯部・裾部共にナデ、脚柱部内面に絞り痕跡が残る。	4/5	
20	4区	土坑15	土師器甕	23.0 (8.1)	7.5Y7/6 橙色 白・赤の砂を多量に含みザラザラした感じ。やや粗い良	口縁部は外傾し、やや外湾気味に立ち上がる。口縁端部は小さく上方につまみ上げ丸くおさめる。口縁部外面をナデ、内面を横方向の細かいハケ。胴部外面を細かい斜方向のハケを施す。内面は磨滅が著しい。	口縁部 1/6	
21	4区	土坑15	土師器甕	18.0 (9.1)	10YR7/4 にぶい黄褐色 胎土：10YR4/1 褐灰色 赤・白の砂を若干含む。緻密良好	口縁部は外傾し、内湾気味に上方に立ち上がる。口縁端部内面に小さな段を作る。口縁部内外面をナデ。胴部外面を細かい縦方向のハケ、内面を斜め方向のハケを施す。	口縁部 1/8	
22	4区	土坑15	土師器甕	22.4 (11.0)	7.5YR8/3 浅黄橙色 赤・白・黒の砂をかなり含む。密やや不良	口縁部は外傾し、やや内湾気味に上方に立ち上がる。口縁端部内面に小さな段を作る。口縁部内外面をナデ。胴部外面を細かい縦方向のハケ、内面に縦方向の板ガキを施す。	口縁部 1/8	
23	4区	土坑15	土師器鍋	34.2 (20.2)	2.5YR6/8 橙色 白の細砂を多量に含む。空隙が多くやや緻密さに欠ける良好	球形の胴部と、大きく開き外反する口縁部を持つ。端部はわずかに外方につまみ出し丸くおさめる。口縁部内外面はナデ。胴部は外面上半をオサエで調整するため多数の指頭圧痕が廻る。下半はヘラケズリ。胴部内面は板ナデ、輪積み痕が残る。三角形状を呈する把手は体部の最大径部分に取り付く。指頭圧・ナデによる成形である。	1/4	
24	1区	井戸1	土師器皿	8.5 1.2	7.5YR8/3 浅黄橙色 赤・白の砂をわずかに含む。緻密不良	ほぼ扁平な底部から、短い口縁部が斜め上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエ。	1/10	
25	1区	井戸1	土師器皿	12.0 1.8	7.5YR8/3 浅黄橙色 赤・白の砂をわずかに含む。緻密不良	口縁部はやや内湾気味に斜め上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエ。	1/12	
26	1区	井戸1	土師器皿	13.0 (2.0)	7.5YR8/3 浅黄橙色 赤・白の砂をわずかに含む。緻密不良	口縁部はやや内湾気味に斜め上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエ。	1/12	
27	1区	井戸1	土師器皿	14.2 1.7	10YR8/2 灰白色 赤・白の砂をわずかに含む。緻密不良	扁平な底部から、口縁部はやや内湾気味に斜め上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエ。	1/2	
28	1区	井戸1	白磁皿	10.0 2.4 3.2	釉色：2.5GY8/3 灰白色 露胎：2.5Y8/2 灰白色 胎土：7.5Y8/2 灰白色 黒の微砂を若干含む。緻密堅緻	口縁部は緩やかに内湾し外上方に延びる。端部は丸くおさめる。小さな削り出しの平高台を持つ。体部内面中程に1条の凹帯が廻る。外面体部下半および高台部は露胎。口縁端部は褐色を帯びる。	1/10	
29	1区	井戸1	白磁椀	18.0 6.1 9.0	釉色：5Y8/1 灰白色 露胎：10Y8/2 灰白色 胎土：10Y8/1 灰白色 黒・白の細砂をかなり含む。密堅緻	緩やかに内湾する体部に続く口縁部は肥厚し玉縁を形成する。底部は時計回りの削り出しの輪高台。見込みに1条の沈線が廻る。外面体部下半および高台部は露胎。	2/5	
30	1区	第1層	土師器皿	6.8 1.3	10YR8/2 灰白色 赤・白の砂をわずかに含む。緻密良好	扁平な底部からごく短い口縁部が垂直に立ち上がる。端部は丸くおさめる。底部はオサエで指頭痕が廻る。他はナデ。	ほぼ 完形	
31	3区	土坑12	土師器皿	8.6 2.2	10YR8/1 灰白色 赤・白の砂を若干含む。密良	丸味を帯びた底部から短い口縁部が外傾気味に立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエ。磨滅著しい。	1/3	
32	3区	土坑10	土師器皿	13.0 2.5	10YR8/4 浅黄橙色 赤・白の細砂を若干含む。密不良	やや丸味を帯びた底部から、口縁部が内湾気味に上方へ延びる。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエで指頭痕が残る。磨滅著しい。	2/3	
33	1区	土坑3	土師器小壺	2.9 2.4	5Y8/3 淡黄色 赤・白の砂をわずかに含む。緻密良好	球形の体・底部と内傾する口縁部を持つ。端部は丸くおさめる。口縁部付近はナデ。外面はオサエで掌紋痕が残る。内面は底部が指オサエ、体部に横ナデを施す。	完形	
34	4区	土坑13	土師器小壺	2.6 2.7	10YR8/3 浅黄橙色 赤・白の砂をかなり含む。密良	球形の体・底部と内傾する口縁部を持つ。端部は丸くおさめる。口縁部内面にナデで平坦面を作る。外面はオサエで掌紋痕が残る。内面は底部が未調整、体部に横ナデを施す。	完形	
35	3区	土坑11	白磁椀	15.4 (5.4) -	釉色：2.5GY8/1 灰白色 露胎・胎土：N8/ 灰白色 黒の微砂を若干含む。緻密堅緻	緩やかに内湾する体部が口縁部に至りやや外反する。内面体部中程に1条の沈線が廻る。体部外面にごく簡略化した連弁文を配する。	口縁 1/4	

遺物番号	調査区	遺構名	種別器種	口径器高底径	色調胎土焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
36	1区	土坑4	瓦器羽釜	20.8 (5.8)	N3/ 暗灰色 胎土：N8/ 灰白色 白・黒の細砂をかなり含む。緻密良好	内湾する口縁部は端部を平滑に仕上げ面を作る。罫は水平方向に張り出す。口縁部内外面・罫部はナデ。体部外面下半はオサエ、内面に板ガキを施し部分的にハケ状の痕跡が残る。	口縁部破片	
37	3区	土取土坑9	瓦器羽釜	16.0 (5.9)	N3/ 暗灰色 胎土：N8/ 灰白色 白・黒の細砂をかなり含む。緻密良好	内湾する口縁部は端部を平滑に仕上げ面を作る。口縁部外面に2条の段を有する。短い罫が水平方向に張り出す。口縁部内外面・罫部はナデ。体部外面下半はオサエ。	口縁部破片	
38	5区	柱穴3	土師器皿	4.6 1.0	7.5YR8/4 浅黄橙色 白・黒の細砂をわずかに含む。緻密良好	ほぼ扁平な底部から、短い口縁部が上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁部内面は時計回りの横ナデ、外面全体にオサエ。	1/3	
39	5区	柱穴3	土師器皿	5.0 0.8	7.5YR8/4 浅黄橙色 白・黒の細砂をわずかに含む。緻密良好	ほぼ扁平な底部から、短い口縁部が斜め上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁部内面はナデ、外面全体にはオサエ。やや歪。	1/3	
40	5区	柱穴3	土師器皿	4.6 1.1	7.5YR8/3 浅黄橙色 黒の砂をわずかに含む。緻密良好	ほぼ扁平な底部から、短い口縁部が上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁部内面はナデ、外面は全体にオサエ。やや歪。	1/3	
41	5区	柱穴3	土師器皿	6.0 1.0	10YR8/3 浅黄橙色 白の細砂を若干含む。緻密良好	ほぼ扁平な底部から、短い口縁部が斜め上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁部内面はナデ、外面は全体にオサエ。歪大きい。	1/2	
42	5区	柱穴3	土師器皿	9.2 2.2	10YR8/3 浅黄橙色 白・黒の砂を若干含む。緻密良好	やや丸味を帯びた底部から、口縁部が直線的に外方へ延び端部付近で肥厚する。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエで指頭痕が残る。	1/2	
43	5区	柱穴3	土師器皿	10.9 2.1	7.5YR8/3 浅黄橙色 白の細砂を若干含む。緻密良好	やや丸味を帯びた底部から、口縁部が直線的に外方へ延びる。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエで指頭痕が残る。底部内面に時計回りの圏線が廻る。器肉が厚い。	ほぼ完形	
44	5区	柱穴3	土師器皿	11.5 2.3	2.5Y8/3 浅黄色 白・黒の細砂をわずかに含む。緻密良好	やや丸味を帯びた底部から、口縁部が直線的に外方へ延び端部付近でわずかに肥厚する。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエで指頭痕が残る。底部内面に時計回りの圏線が廻る。	1/2	
45	5区	柱穴3	土師器皿	12.2 2.3	7.5YR8/3~8/4 浅黄橙色 赤・黒の細砂をわずかに含む。緻密良好	ほぼ扁平な底部から、口縁部が外反気味に斜め上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエで指頭痕が残る。器肉が厚い。	完形	
46	5区	柱穴3	土師器皿	13.0 2.5	7.5YR8/3 浅黄橙色 白の細砂をわずかに含む。緻密良好	やや丸味を帯びた底部から、口縁部が直線的に外方へ延びる。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエで指頭痕が残る。底部内面に時計回りの圏線が廻る。	7/8	
47	5区	柱穴3	土師器皿	12.7 2.4	7.5YR8/3 浅黄橙色 白の細砂をわずかに含む。緻密良好	ほぼ扁平な底部から、口縁部が直線的に外方へ延び端部付近でわずかに肥厚する。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエで指頭痕が残る。底部内面にごく浅い圏線が廻る。	2/3	
48	5区	柱穴3	土師器皿	12.5 2.5	7.5YR8/3 浅黄橙色 赤・黒の細砂をわずかに含む。緻密良好	やや丸味を帯びた底部から、口縁部が直線的に外方へ延び端部付近でわずかに肥厚する。端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエで指頭痕が残る。底部内面にごく浅い圏線が廻る。	完形	

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわひがしのちょうこふんぐん・むらのうちちょういせき・ときわなかのちょういせき							
書名	常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-20							
編著者名	鈴木廣司・菅田 薫・山本雅和							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわひがしのちょうこふんぐん 常盤東ノ町古墳群	きょうとしうきょうく 京都市右京区	26100	874	35度 01分 08秒	135度 42分 33秒	2008年11月 10日～2009 年3月17日	985m ²	道路拡幅 工事
むらのうちちょういせき 村ノ内町遺跡	うづまさいちのいちよう 太秦一ノ井町・		907					
ときわなかのちょういせき 常盤仲之町遺跡	ときわひがしのちょう 常盤東ノ町 ほか知らない 他地内		908					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
常盤東ノ町古墳群	古墳	弥生時代			弥生土器、石製品、銅製品			
村ノ内町遺跡	集落跡	古墳時代後期	横穴式石室、土坑		土師器、須恵器、ガラス製品、土製品			
常盤仲之町遺跡	集落跡 ・墓跡	飛鳥時代 ～奈良時代	竪穴住居、溝、土坑		土師器、須恵器			
		平安時代	溝、土坑		土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、軒瓦			
		鎌倉時代 ～室町時代	掘立柱建物、土坑、土取土坑、柱穴		土師器、瓦器、輸入陶磁器、軒瓦、石製品、銭貨			
		安土桃山時代	掘立柱建物、土坑		土師器			
		江戸時代	土坑、柱穴		土師器、銭貨			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-20
常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・
常盤仲之町遺跡

発行日 2009年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961